

# 靈基No.12 酒吞童子



## PROFILE

身長：145cm 体重：46kg

日本三代化生の一角。京楽的な鬼の少女。  
マスターのことはいつか食べたいと思っている(色んな意味で)。

魔力供給回数：184回 絶頂回数：222回  
好きな体位：後背位 処女喪失日：召喚から4日目

妊娠確率：72%【安全日】

「旦那はんの子を妊娠するんもよろしおすなあ。  
ほな、一献……溶け落ちるまで交わしましょか」

## STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：A+	★★★★★	知力：B	★★★★☆
体力：A+	★★★★★	母性：A	★★★★★
従順：B	★★★★☆	反抗：D+	★★★☆☆
淫乱：A	★★★★★	感度：A	★★★★★

「旦那はんの好きにしてええんよ。  
うちの体も……うふふ、ほら。こないに火照っとるさかい」

# 霊基No.12 酒吞童子



## SECRET GARDEN EX

### SG1：快樂主義

奔放な彼女は「楽しいかどうか」で行動する。  
マスターとの肉体的な相性が良いと知るや否や、  
彼女は捨てられた子犬のような目で毎夜の如く行為をねだってくる。

### SG2：面食い

極度のイケメン好き。逆ハーレム願望も。  
肉食系でとりあえず手を出しとく体質。  
でも意外と好きな相手には従順的。

### SG3：キュートアグレッション

マスターのことはいつか「食べてしまいたい」と考えている。  
それは嫌いだからではなく、寧ろ行き過ぎた愛情表現として。  
「いつか旦那はんのこと、ぜんぶ美味しくいただくで」

## WEAK POINT

mouth : ★★★★★☆

蕩け墮ちるような口付けが好き。  
こっそり酒を含ませて酔わせようと  
してくるので要注意。

anal : ★★★★★☆

快樂にとことん忠実な彼女は普通のセックス  
では満足できず、色々なことに挑戦したがる。  
こちらは流石の彼女も耐性が無く、いつに  
無く弱々しい酒吞童子の姿が見られる。

vagina : ★★★★★☆

底無しかと思わせるほどに深い膣内。お腹が  
パンパンに膨らむほど、抜かずに何度も  
連続射精されるのが好き。

## LIVE



状態：♥♥♥

生粋の鬼である彼女を  
孕ませられるかという  
疑問はあるが、おそらく  
問題は無い。寧ろ問題  
なのは「何人孕ませさせ  
られるか」ということだ。

——  
マイルーム

「退屈だから」と、酒吞が遊びに来るのはそう珍しいことでもない。

カルデアの備蓄からくすめたお酒と、お気に入りのお酒を両手に。晩酌に付きあってほしいのだろう、今日も今日とて遊びに来ている彼女なのだが——。

「……だからって、なにも俺の膝の上で晩酌することはないと思うんだけど……」

「あら。旦那はんったら意外と初心なんやねえ。うちが勝手に座っとるだけやさかい、あんたはんの好きにしてくれてもええんよ？　なあ？」

注がれた酒を一気に呑み干し、からかうような笑みで少女はそう言った。

酒吞——酒呑童子。アサシンのサーヴァント。

額から伸びる二本の異形の、紫の和装が特徴的な少女。カルデアに召喚されたサーヴァントの一騎。"鬼"としての逸話を有する童女の反英雄である。

見た目は幼く、小柄だと言うのに、仕草や言動はどこか艶やかな。露出過多な恰好のせいで、少女の隠すべき部分が見えたり見えなかったりする、そんな色んな意味で危ないサーヴァントである。

「旦那はんつたら……そないに緊張せんと、ほれ、どこでもぎょうさん見てくれて構へんぞ?」

ちら、と太ももに掛かる服をたくし上げ、蠱惑的な瞳で見つめてくる酒呑。

だからそういうのは目のやり場に困るのでやめていただきたい。こっちはこっちで色々大変なんだから。

「せやけど、旦那はんのことやし、なあんも問題あらへんのとちゃうけど?」

「……と、言うんと?」

5 「ここにおる、鬼も取って喰わんような年の子ら……ぜえんぶ手籠めにしてきたんやろ?

ふふふ、えげつないわあ。うちも大概やけど、旦那はんには敵いまへんわ」

「手籠めにつて、人聞きが悪いなあ……」

酒呑の言い方に、悪意的な何かを感じてしまう。

確かに、俺がカルデアにいる幼女たちと関係を持っているのは事実ですが、あくまでこれは純愛……みんなとは誠実にお付き合っているだけです、誠実に。

やましいことも、後ろめたいこともしていません。令呪で無理やり、なんてエロ同人的なこともしていません。ちゃんと健全なお付き合いをしているので安心してください。

「健全、なあ……ほな、あの甲賀望月の……前に、あの娘に耳と尻尾つけさせ散歩しとったやないか。あれも旦那はん的には純愛なんやろか？」

うん、純愛。

「お仕置きや言うて、性具で遊びはったのも？」

うん、純愛<sup>せいふ</sup>

「外で粗相させ、それを愉しそおに眺めとったのも？」

うん、純愛<sup>せいふ</sup>。……だと思う。

「っていうかなんで知ってるのかな酒吞さん。もしかして見てたの？」

「そら気付くわ。暇で散歩しとったら、旦那はんがああ娘つれて愉しんどるんやもの……うちかて鬼やし、あんなん見せられたら昂ってしよーないわ。なあ？」

そう言って、酒吞がぐりぐりとお尻を押し付けてくる。

身体を寄せ、誘惑するように、柔らかな肉の触感を存分に伝えてくる。

7 「ふふ、旦那はんの……すっかり硬くなってるわ。ほんま堪え性のないお人なんやから」

「そりゃこんな事されて反応しない方がおかしいだろう。

自分の息子も例に漏れず、彼女の誘惑の前に十全の勃起を果たしていた。

「……………いいかな？」

「ええよええよ。女が男の部屋たずねてすることなんて、一つしかあらへんわ。うちもそのつもりで来たんやし……………ほな、服ぬぎましょか」

誘うような笑みを浮かべて。

酒吞が次々に身を隠す装いを外していく。着物、鎧、着々と裸へと近付いていく少女の姿を眺めつつ、自分もまた服を脱ぎ始めていた。

「…………………………」

「……………どうしたの？」

しかし、何やら酒呑の様子がいつもとは違う。

普段は乗り気というか、喰われかねないと錯覚するほどに積極的な彼女なのだが、どこか反応が薄い。もしかして体調が良くなかったり——今日はやめとく？

「そ、そないことあらへんよ……！　ただ——」

「ただ？」

酒呑があまり見せたことのないような表情でつぶやく。

「最近、旦那はんとはけっこうご無沙汰やって……久々にトロけおちるまで交わりたいんですよ。……あ別に普段の旦那はんとじゃ物足りひん、って言っとるわけやない。ただ、うちも鬼やし……普通じゃ満足できひんのや」

少し寂しかった様子で、寄りかかるように。

なるほど……確かに最近、酒呑にはあまり構ってあげられていなかったかもしれない。ああ見えて甘えたがりというか……わりと懐っこい彼女のことだ。少し寂しくさせてしまったことを謝ると共に、その愛らしさに苦笑する。

(普通じゃ満足できない、か……)

上目でねだるように見つめてくる少女の言葉、それを脳裏で反芻する。何をすれば満足できるかなんて分からない。自分のことである酒呑自身も分かっていないのだから、難しい問題だ。

「旦那はん？」

「……そうだな。それじゃあ——」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ああん、もう。そんなにじろじろ見んと。恥ずかさで火照ってまうやないの……」

戸惑いぎみの眩き。だが、どこか楽しんでるように。

「お・い・ど・の・穴・で・なん・て、旦那はんったら流石やわあ……うちかて人様に見せよんのは初めてなんよ？ そない面白いモンでもないやろし……」

ベッドに突っ伏し、お尻をこちらに突き出したまま、酒吞は赤面するようにそう言った。おいど——つまりは、お尻。当代風に言えばアナルと呼ぶべきか。

自分の目の前には、少女の隠されることのない、秘するべき入口が置かれていた。

お尻を突き出すという無防備な姿勢である以上、それを見ないなんて選択肢は存在しない。硬く閉じられた洞穴。ほんのり桃色があった花園。自他共にまじまじと見る機会のないであろう菊の文様を、自分は興味津々となって観察する。

(とは言っても、これは入りそうにないなあ……)

改めて冷静になって、少女の入口が硬く閉ざされていることを理解した。

俺が提案した作戦——すなわち、肛門での性交、アナルセックスをするには、もう少し準備が必要だろうことを認識する。

「……それじゃあ行くよ。力抜いて——」

「ふふ、どないな感じなんやろ。気になるわあ……」

互いに未体験、未開拓の部分を使う以上、好奇心が抑えられない。

期待と新鮮さに笑う少女は俺の為すがままに任せると言った風に待ちわび、俺はその突き出されたお尻……少女の小さなアナル目がけて指を伸ばす。そして——挿入。

「ひゃあっ……♡」

「え……?」

ずぼおっ、と。

強引に指を差し込んだ瞬間、どこからともなく可愛らしい悲鳴が聞こえてきた。

「今の……もしかして、きみ?」

「……なんのことやろ?　うちがそない生娘みたいな声……」

ああうん、やっぱりそうだよなあ。

先程のは聞き間違いだったと訂正し、再度、指によるアナルへの愛撫を開始。すると、

「んっ——あっ、はあああんっ……♡　くっ、んう……はっ、んんっ……♡　なんやの、これっ……うちのなか、掻き回されてっ……はうん、んっ、やっ、ああんっ……♡」

指で内部をほじくる感じ。その途端、酒呑の口から聞いた事もないような声が漏れ出し

た。

予想外……というか新鮮だ。彼女がそんな声を出すとは思ってもいない。というかイメージにそぐわない、そんな勝手な印象を持っていただけに、この数秒の間で起きた少女の変異は、自分をただただ興奮させた。

「ッ——もっと奥まで行くぞっ……!!」

「ひい、あっ……そない、激しく、せんとっ……あ、ああっ、うちのおしり、旦那はんの指でおかしくなっとるっ……♡ あっ、やっ、恥ずかしくて、死にそうやわっ……んあっ♡」

膣とは違う、肛内の感触。

如何ほどのものは分からぬが、流石の酒呑もこれには耐性が無かったらしい。

「ん、ふう、っ、ひゃ——旦那はんには、ほじほじされ、て——あんっ、はあん……♡ そないにぐりぐりされひゃ、うちのあな……広がって、っ……ん、ああんっ♡」

少女の、それも年齢一桁を思わせるような子供のお尻の穴。

指の一本で限界という狭さのそこは、広げられることを拒むかのように指を締め付ける。

(もっと滑らかに……)

指の抽挿をスムーズにしたいと考え、その下、手を伸ばしたのは膣の方だ。

尻穴を弄られる事で、苦しさとは違う、快楽を覚えてきているのだろう。

酒呑の雌穴は汗とは別の、艶のある愛液に濡れ始めていた。

それを潤滑油として指に塗り付け、アナルへの愛撫を滑らかにする。加速した指のストロークは少女の尻穴を何度も往復し、自分でも分かるほどに広さを増していった。

「あっ、はあ……んっ、やあ……♡ おまんこも、おしりも、旦那はんに触られて、ぐちよぐちよになっとるわ……♡ んくっ、はああんっ、あっ、んあっ……これ、すご、くっ——ひゃうっ、ん、いっ……あ、熱く、なってる……んっあああっ、これっ……来るっ、んっ、はあっ……♡」

ベッドに突っ伏した少女の身体が、快楽にわなわなと震え出す。涎を垂らし、だらしない顔で、快楽の極みを迎えようとしている。

(酒吞がこんなに早くだなんて、今までにないな……)

その一方、妙な達成感を覚えつつ、自分も愛撫に勢いを付けていった。

「ひゃっ、はあんっ、んんっ……♡ おしりで、イカされるっ……♡ 旦那はんに、お尻の穴ほじられて、んっああっ、イク、イクっ……♡ 耐えられへんわあっ……♡」

アナルの内部が痙攣しているのが分かる。

広がりつつあった尻穴はぎゅううっと締まり、同時に少女の身体が大きく跳ねた。

瞬間——。

——ふしやっ、ふしやああああっ……！

「んあ、ああああああっ………♡ あっ、ツ、ああああああっ………♡」

指を痛いほどに締め付ける。

膣穴からは景気よく愛液が跳びはねる。

絶頂——アナルへの愛撫というだけで、酒呑の身体は快楽に満たされていた。自分も彼女も舐めていたところがあつたのかもしれない。だが結果は、少女はかつてないほどに乱れ、堕ちていた。それだけでも十分な成果と言える、が——。

「あ、んあっ………これ、すごいわあっ………♡ くせになってしまいそうやさかい………♡」  
身体を痺れさせ、ベッドに倒れたままの状態で呟く酒呑。

「ッ………!!」

だが、その光景はあまりに凶悪だった。

痙攣したまま動けぬ少女。襲ってくれと言わんばかりに突き出されたお尻。達した直後

のためか、少女のアナルは呼吸するかのようにはくついていて。本能が挿れたいと叫んでいた。

「ん、んう……旦那、はん……？ どないしたんやろ、そない息荒くしよって——ひゃ、ああああああつっ……！！」

少女が油断していたその隙を穿つような再開。

余韻に浸っていたのだろう。完全に弛緩しきっていた酒呑に止める手立てはなく、刹那、自分は怒張したその肉棒を彼女のアナルへと勢いよく挿入していた。

「あっ♡ はっ、やんっ♡ 旦那はんの、おちんぽっ……うちのなかに、入って、来てっ……♡ ひ、あっ、あんっ……これ、すごい、わあ……っ♡ 指と、ぜんぜん違っ……あ、ん、んう♡」

突如訪れた未体験の刺激に、少女が驚いたように声を上ずらせる。

「これっ……んっ、おしり……深っ——旦那はんのが、出たり入ったりっ——はああんっ♡」

狭い。ただただ狭い。

膣とはまた違った感触。肉棒を根本から締め付けるその締め付け。

おそらく指によってほぐしていなければ、入れることさえ難しかっただろうその穴に、自分も言葉にしがたい感情を覚えながら腰を振っていた。

「きゃっ、やっ……旦那、はんっ……♡ おちんぼ、そないに激しくせんとっ……ん、んっ……旦那はんのが、尻穴かきまわしてっ……うち、おかひくなっひゃっ……ん、あっ♡」

ここまで弱々しい……というか、されるがままの酒呑を見るのは初めてだ。

普段とはまた違った少女の姿に新鮮さを覚え、腰を振る動きにも力が増す。

子宮いきじまりはなく、ただひたすらに深い。言ってしまうえば、それだけの空間。

なのに——面白い。単純な「掘る」という作業にどこまでも熱中してしまう。

「いつ、あっ……知らん、わぁ……こないな、ことお……んっ♡ お尻の、なかつ……旦那はんのカタチに、広がるとるっ……♡ あっ、はあっ……これ、あかん、わ……っ、壊れ、そこに、なるっ……ん、くうんっ……♡」

苦しそうで、それでいて愉しそうでもある酒呑の嬌声。

最近、ご無沙汰だったことが影響したのか。少女のアナルは寂しそうに肉棒へと吸い付いてくる。まるで駄々をこねる子供のようだと、その愛らしさがたまらない。

「酒呑、体勢変えるぞ」

「あ、んんっ……旦那はんの、好きにして、ええよ……♡ うちの身体、たんと味わって……んっ、あ——は、あっ、これ、深ッ——おちんぼ、突き刺さるとるっ——くはっあっ♡」

少女の矮躯を持ち上げ、腰に下ろす。両脚を広げ、さらに深い部分へと挿入。

下から突き上げられるような体勢となった酒吞は、先程以上に激しい様子で咆哮する。これも幼い彼女の体格だからこそできる技だ。

少女の軽い身体を落とし、自分は腰を浮かす。亀頭の先端は更に奥を掘削していき、少女のAnalは肉棒を根本から啜え込む。この深いつながり、完全に包み込まれる快感が、目の前の少女への愛しい気持ちを増幅し、

「あ、はあっ……すごい、わあ……っ♡ ぜんぶ、丸見えっ……うちのおしり、旦那はんのおちんぼ、あないにいやらしく啜え込んでっ……♡ おまんこも、ひくひくしとるわあ……♡」

その時、不可抗力ではあったのだが、あることに気が付く。

マイルームに備えていた等身大の鏡——身なりをチェックするために置いていたそれに、奇しくも、少女と自分の交わる姿が映っていたのだった。

「こないな姿……恥ずかしくて、死んでまうわ……♡ あんま見んといてや、旦那はんっ……♡」

「そんなこと無いと思うぞ。すごく可愛いよ、酒呑」

「ああんっ、もうっ……♡ 旦那はんは、ほんに、鬼畜なお人やわあっ……♡ そない、可愛いなんて、言われたらっ……ん、はあ、ひあっ——♡」

鏡に映った少女の姿を眺めつつ、その率直な感想を伝える。

ㄇ字に開かれた少女の両脚。その下から突き刺すカタチで勃起している肉棒。

アナルはいやらしく肉棒を咥え、その上にある膣口は直接触れてもいないのに喘いでいる。

そんな——結合部を丸見えに晒された状態を、酒呑は珍しくも恥ずかしがっていた。普段は上に跨り、主導権を握る事の多い彼女が、俺に抱えられた状態で、為すすべなく肉棒に突かされている。あまり見た事のない彼女の痴態に、興奮するのは当然のことだと言えた。

「んっ、ひゅ……おしりっ……旦那はんの、おちんぼで、えぐれてっ……♡ はあ、あんっ、

お尻、こないに、気持ちええなんてっ……ん、あぁっ、もう我慢できひんっ……♡

酒呑の身体が小刻みに震え出す。

アナルの締め付けは依然として強く、肉棒を引き抜く度に何度も吸い付いてくる。

「あっ♡ あんう♡ 旦那はんの、おちんぽもお……びくびく、しとるよお……♡ うちのなかで、びゆるびゆる出したって、叫んどるわぁっ……♡」

加速する腰の運動と、ペニスの感触で察したのだろう。

酒呑の言う通り、俺の限界は近い。だがそれは彼女も同じことである。

「あ、やつ、ナカっ、ナカで出してええよっ……♡ 旦那はんのあっつい精子、うちのおひりに、ぜんぶ、ぜんぶっ……ぎょうさん出してえなっ……♡」

身体全体を使って膣内射精ならぬ肛内射精を訴えてくる酒呑。

その思いには応えてやりたい。というか、それ以外に考えられない。

「イク、イクっ……♡ 旦那はんのおちんぽで、おしりのあなっ……ひい、っ、くううんっ……も、らめ、っ……いく、イ、ッ——んああ、あっ、ああああんっっ……♡」

凄まじいほどの快楽に襲われる。

少女のアナルは今までで一番の締め付けを發揮し、絶対に逃がすまいとして肉棒を捕まえる。

故に、ただひたすらに腰を振った。ただひたすらに少女を突き上げた。

鏡の中では、少女の尻穴を犯す一振りの男根が映っている。生殖に使うべき穴ではなく、不浄の禁忌を犯すという背徳的な光景に、興奮が最高潮に達した瞬間——。

「ッ——！！！」

——びゆる、びゅっ、びゅうううっ、びゅううっ……！！

「ひああ、あああああああつっ——！！——あああつ、はあああつ！！——熱、う……：旦那

那はんの、子種……うちのおしりに、びゆるびゆる、出とるよお……♡」

精液のタガが外れる。同時に少女の方も達したようだ。

強烈な締め付けは、まるで根本から吸い上げるようにして射精を促してくる。

「あ、ああ、っ……旦那はんのせーし……んっ、おしりのなか広がってえ……火傷しそうやさかい……♡」

ドクドクと流し込まれる精液を、恍惚とした表情で受け止める酒呑。

妊娠してしまうわ、などと冗談を呟く少女だったが、そう錯覚してもおかしくないほどの量を射精したと自分でも思ってしまう。

「ん、あつ、旦那はんの……おしりから、ぎょうさん溢れとるわあ……♡」

じゅぽお、と。肉棒をゆっくり引き抜くと、栓の意味を成していたそれが抜かれたことよって、少女のアナルから大量の白濁が溢れ出した。

お尻の穴から精液が溢れ出すという奇妙な光景に不思議な感覚を覚えつつ、一方の酒呑は、アナルをひくつかせながらその様子を嬉しそうに眺めていた。

「旦那はんはやっぱり最高やわあ……うちと身体の相性も抜群みたいやしね……♡」

どうやら満足できたようで、自分としても良かったと安堵する。

ただ——「旦那はんは鬼以上に鬼畜やね。恐ろしい人やわあ」と言われたのだけは納得がいかない。本物の鬼にそう言われるとか、俺ってどんななのさ。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——後日、深夜。

「なあなあ、旦那はん……?」

「ん……酒呑、か……?」

眠りについていたその最中、そんな少女の声に起こされる。

「退屈やわあ。うちと遊びましょ?」

「遊び、って……もう夜じゃないか。流石に寝る時間だよ……」

「んもう、旦那はんのいけずう……そない、つれへんこと言わんといてや」

そう言って、酒呑が寂しそうに身体を寄せてくる。

甘えるような猫なで声で、可愛らしくお願いしてくる。

「仕方ないなあ……一回だけだよ?」

こうなった酒呑は何かと聞き分けがない。ので、素直に折れておく。

とは言っても、流石に今日は疲れているので、出来ても一回が限度だろう。

その事を伝えると、酒呑は「構わない」と頷いた。

いまだ意識は暗く、重い。起こされたという事もあって、身体もどこか気だるげだ。

だが、そんな虚ろだった意識が一瞬で覚醒する。いそいそとこちらにお尻を向け、まるで広げるように指でその穴を主張してきた——少女の卑猥な部分を目に擦ればこそ。

「ッ——酒呑、それはっ……!!！」

「……旦那はんのせいで、おい<sup>こ</sup>ち<sup>ち</sup>の穴……うずいて仕方ないんよ。あんたはんが悪いんやで、うちにこないなこと……教えよったんやさかい……♡」

いっぞや使ったその穴。酒呑のそこは、待ちわびるように疼きを示していた。

まさかとは思うが……この子、ハマってしまったのだろうか。良かれと思って開拓したその場所が、少女に新たな性癖を芽生えさせる契機となったなんてこと——

「あんじようきばりや、旦那まなすはん。うちみたいな鬼を抱いてしもたんや。責任、取ってもらわなあきまへんなあ♡」

「ひっ……」

知らぬ間に死亡フラグを選んでいた、なんてのは良くあることだ。

その後、いつにも増して欲望全開となった酒呑に、精魂尽き果てるまで搾り取られたの  
は言うまでもない。

# 靈基No.13 望月千代女



## PROFILE

身長：154cm 体重：46kg

戦国時代末期、甲斐武田家は歴史に名を残す女忍者にして。  
生真面目で義理堅いが、けっこうポンコツ。

魔力供給回数：99回 絶頂回数：129回  
好きな体位：寝バック 処女喪失日：召喚から28日目

妊娠確率：50%【安全日】

「今の拙者はお館様に永劫の忠節を誓った身。  
何なりとご用命を。……さあ、なんなりと」

## STATUS

絆LV 100   
Next 0

性欲：C	★★★★☆	知力：A+	★★★★★
体力：B+	★★★★☆	母性：C	★★★★☆
従順：A++	★★★★★	反抗：E	★★☆☆☆
淫乱：D	★★★★☆	感度：B	★★★★☆

「拙者は忍びにござる。  
諜報、偵察、暗殺……勿論よ、夜伽も……何でもござれである」

# 霊基No.13 望月千代女

## SECRET GARDEN EX

### SG1：くのいち

忍びとして活躍した彼女は、殿方を誑かす技術にも長けている。寝室では彼女の夜伽スキルが遺憾無く発揮され——る様子は今の所なく、あくまで本人の主張に留まっている。

### SG2：未亡人

属性過多。忍で巫女で未亡人。ただ今の自分は生前とは別人なので浮気には当たらないそうで、おそらくはそうした経験も皆無。流石は千代ちゃん。

### SG3：懲罰願望

忠節系サーヴァントとして間違いなく優秀なのだが、敵によく捕まったり、どこかポンコツ臭がする。その度に「如何なる罰をも受ける覚悟にして」と体を差し出して来るが、それ目当てな気がしないでもない。

## WEAK POINT

### body：☆☆☆☆☆

全身に回る縄状の痣は蛇の呪を受け継いだ証。お願いすれば恥ずかしがりながらも全裸になって見せてくれる。

### clitoris：★★★★☆

くのいちである彼女は絶対に屈さない。……のだが、そこをくりくり責められると呆気なく敗北宣言してしまう。

### vagina：★★★★☆

蛇のように細長くうねった膣内。罰を受けるが如く、乱暴にされるのが実は好き。ご用命とあらばいやらしいポーズでおまんこを開き・おねだりさせることも可能。

## LIVE



状態：♥♥♥

浮気ではないので妊娠しても問題なし。「孕め」と言われると妊娠確率が一気に急上昇する。



レイシフトした先、旧き時代の景色が広がる戦場。

「■■■、■■■、■■■ツ——！！！」

荒れ狂う乱世を舞台に、一体の黒武者とされるエネミーの咆哮が鳴り響いた。

身長にして人間の二、三倍はあろうかという巨体。禍々しき気配を掲げた黒武者は、その手に携えた巨刀を勢いよく振り下ろす。

狙いはただ一騎。剛力より繰り出された一撃は、敵の命を潰し殺さんとして膨大な狂気を振り放つ。直撃すれば、おそらくは肉片も残るまい。だが——それを少女は避ける。影を絶つが如し速さで回避する！

「これぞ甲賀流！ お館様の敵、仕留めまする！！！」

黒武者の一撃を、軽快なバックステップによって回避していくその少女。

小太刀を逆手に、防御よりも機動力と隠密性能を重視したような……忍び装束、というものだろうか。この景色にあっては違和の無い出で立ちの彼女は、その矮躯一つで以て巨

人と立ち向かっていた。

「鈍重にござるな。それで拙者を仕留めようだなどとは——笑止！」

少女——アサシン・パライソ。その真名を、望月千代女と云う。

アサシンの名を冠する通り、その身は紛う事なきサーヴァントであるものだ。

外見は童女。血や争いといった類の言葉が似付く事の無い……だが、どこか妖艶な色香にも包まれた奇妙な少女だ。あるいは、忍び。——女<sup>くのい</sup>忍<sup>い</sup>者<sup>ち</sup>”と呼ばれる存在に他ならない。

「覚悟召されよッ！」

そして、少女が両手で印を結んだ。

攻撃が空振りに終わった無防備な黒武者へと放つその一撃。

己が有した異能、その力の一端を忍術という形で直撃させたのだ。

巨大な爆炎……黒煙が黒武者を大蛇の如くに包み込む。

これぞアサシン・望月千代女が有し、忍術が応酬。その変幻自在たる術法の連撃は強力の一言に尽きる。それこそ、暗殺を得手とせし忍びという存在を根底から覆すような……これがサーヴァント、これが甲賀上忍の力ぞなれば。体躯の違いなど、些細なハンデにすぎぬのやもしれない。

だが――、

「■■■■■■ツ――」

「くっ……仕留めきれなんだかつ！ おのれっ……！」

必殺を信じた一瞬。

だが、それを真っ向から否定するように、黒武者が煙を裂いて飛び出してきた。僅かに火力が足りなかったか。それとも、急所を外していたのか。兎にも角にも、少女の攻撃は致命傷とは為らず、猛り狂った武者の咆哮が辺りを響かせた。

“これはマズい、喰らうな”――勝利を確信した一瞬は、彼女にあるまじき致命的な油断となったのだろう。回避は出来ぬと知って、少女は強く歯を食いしばり……

「千代女っ！」

「ッ……お館様!？」

大地を唐竹の如くに両断する黒武者の攻撃。それを少女が避けられたのは他でもない。彼女が「お館様」と仰ぐ少年。カルデア唯一とされるマスター。彼が走り出し、寸前の所で救出してみせたからである。

スキル、ガンド——いや、間に合わない。動きを止めたところで、あの黒武者は刀を振り下ろす。そう理解した瞬間、走り出していた。守られるべきマスターが前に出るなど、自殺行為にも等しいだろうに……しかし、だが確かに、その蛮勇は少女の窮地を救っていた。

「お館様、お怪我をっ……!!」

「大した傷じゃない。それよりも……!!」



「申し訳ございませぬ、お館様……拙者の未熟さ故、お館様にこのような傷を……！」

主君と仰ぐ少年の前で、千代女はただただ頭を下げていた。

それに怪我を負った筈の彼は、気にしないで、とだけ告げる。この傷はマスターである自分が背負うべきものであって、お前が悔やむ必要は何処にも無い——と。

だからと言って、少女の気持ち晴れるかと言ったらそうではない。寧ろ、彼に氣を使わせてしまった事が余計に重く押し掛かるのだろう。

「お館様……」

この日の事は、少女にとって深い後悔を刻むべき記憶となったに違いない。

「この罰は、いずれ受け取りに参ります……！ 如何な罰であろうと、必ずや……！」

その時は氣にも留めなかった台詞。

それが後に「あんなこと」になるとは……この時の彼はまだ知らない。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

—— 数日後。

「ふう……エレナと話してたら、すっかり遅くなっちゃった。急にストレス爆発して幼児退行するもんだから、落ち着かせるのに苦労したよ……」

誰もいないカルデアの廊下で、何となく独り言を吐き零す。

時刻は翌日を示し始めた頃合い。せっかくの休日ではあったが、午前中はイリヤたちの勉強を見てやり、午後はアリスたちのお茶会、そして夜はエレナに付き合っ……と、休む暇はほとんど無かったようにも思われる。

くたびれた身体を動かし、自室を目指してひた歩く。こんな夜だ。もうほとんどの人間が眠りに就いただろう時間帯に、出歩いている者など一人もいない。……自分を除いて、だ

が。

「ただいま……つと。いやまあ、誰もいないのは分かってるけど、何となく……」

マイルームに辿り着き、特に意味もなく。

誰かが居てこそその「ただいま」だろうが、まさか「おかえり」が帰ってくるわけでもなく、  
気ままに部屋の扉を開けた瞬間——。

「お待ちしておりますとお館様。ひどくお疲れの様子……ですが、どうか拙者の話を聞かれ  
たし」

「——！！（声にならない叫び）」

いた。部屋の中に。扉を開けてすぐ。

アサシンのサーヴァント、望月千代女……女忍くのいち者である少女が、そこにいた。

「……確か、部屋の鍵は閉めていたはずだけど……」

「拙者、忍びであるからして。このような ”せきゆりていー” を突破するなど、造作もな  
く」

「……いつからいたの？」

「お館様が戻られる、ほんの十二時間ほど前かと」

「……ずっとこの体勢で？」

「忍びであるからして」

「……すごく待ってたんだね」

「忍びであるからして」

「……………」

片膝を付き、頭を下げた、こう……忍びっばい姿勢で。

いるはずのない少女の登場に、心臓はバクバクと音を立てて驚いていた。

流石はアサシン。流石はSHINOBI。気配を殺し、人の虚を突く事に関して、彼女たちの右に出る者はいないだろう。それほどまでに驚いたのだ。いや本当に。

「まあいい……で、千代女はどうして俺の部屋に？ なにか俺に用事でも？」

意識を切り替えて。

望月千代女。最近召喚された、カルデアのサーヴァント。

俺がそう問うと、少女は頭も上げぬままにそれを告げた。先日の件に関して……約定通り、罰をいただきに参上したでござる、と。

「……罰？」

困惑。思いがけない発言に首を曲げた。

「罰って言うのは……つまり……」

「然り。先の戦いではお館様に傷を負わせ……その不始末、はじめを付けに参りました。どうかこの望月千代女に罰をお与えください。如何な罰であろうと、拙者、応じてみせます故！」

力強く告げられた少女の言葉に、ようやく自分も思い出してきた。

それは確か、いつかのレイシフトした先での事だ。戦いで窮地に陥った千代女を助けた際、ちょっとした傷を負ったような……無論、命に別状はない、些細な怪我である。しかし、それを少女はどうにも深く気にしているようだった。

(真面目だなあ、ほんと……そんなに気にしなくてもいいのに)

やれやれ、と。呆れるほどに律義な彼女を面白く思い、小さく苦笑する。

さて……………ばつ……………罰、と言ったか。要するに、マスターである自分に叱ってほしいという事だろう。その理由というか意味は分かるが、だからと言って罰を与えるのはどうかとも思う。

そもそも、原因は自分の方にあるのだ。仲紳レベルを上げるためを深めるため、靈基レベルの不完全低いな彼女を連れて行ったのは自分だし……………千代女が気に病む理由は何処にも無いと思うのだが。

「しかし、しかし……………！ 拙者はお館様の僕、この身は主命を果たす事にこそ使われまする！ 如何な要求、如何な命令であろうと果たすのが忍びの使命……………！」

「……………」

「ですが、このままでは貴方様に仕える、その資格すらありません。我が忠節は永劫、貴方様の御傍にある事を誓ったもの……………故に、どうか拙者に罰を与えてほしいでござる。拙者には……………お館様に仕えられぬ事が、何よりも……………」

辛そうに、あるいは、寂しそうに。

傷を負わせた事だけではない。その事を罰してもらえない、それが苦しいのだと少女は言う。

忠義の何たるかを自分は知らないが、それでも分かる事はある。たとえ主君オレが許す、気にするなど言っても、それで自分自身が許せるかというのはまた別の話なのだ。

彼女が自分を許してやるためにも、明確な罰という形での許しが必要なかもしれない。俺が与えたいからではなく、彼女が欲しているからこそ……罰。

「……よし、分かった。そこまで言うなら好きにさせてもらおうぞ」

「……！ 感謝にござる。どうかこの望月千代女を……好きにされたし」

ホッと安堵したように、千代女はゆっくりと胸を撫でおろす。

俺としても、彼女がこのまま頭を下げたままなのは気分が宜しくない。献身的に尽くしてくれるのは嬉しいのだが、やはり性格的に合わないのだろう。自分のため、彼女のため……ここは一つ、彼女の望む「罰」というものを考えてみよう。



小動物のように怯えるサーヴァントが一人。

「お、お館様……この面妖なりし道具の数々は、いったい……」

ずらりと用意されたそれらを見て、千代女は不安にも似た感想を吐き零した。

「いえ、意図は分かるでござる。拙者はサーヴァント……痛みには耐性があります。それでは無意味と、だからその……これは、恥辱を与える類の罰であると……」

そこまで理解しているのなら話は早い。

罰とはなにも、痛みを与えるだけが全てではないだろう。時には快楽が罰となり得る事だってあるはずだ……多分。そんな感じの漫画なり映像なりを見た事がある。もちろんR18だ。

「ですが、これはあまりにも……」

「ん？ さっき如何なる罰でもって言ったよね？」

「それは、そうでござるが……っ、いいえ！ 拙者はお館様の忠実な僕！ どのような罰であれ、泣き言は言いませぬ！ 選り好みなど、以ての外でござる！」

半分涙目で叫ぶ千代女だったが、真面目な性格が災いしたのだろう……断るに断れない、そんな逃げ場のない状況に苦しんでいる様子だった。

多少の申し訳なさを感じつつも、自分もまた覚悟を決める。手始めにと、ベッドに無造作に置かれていた黒色の帯を手にとって……。

「それじゃ、まずはこれを付けてね」

「これは……目隠し、でござろうか。それと手枷にござるな」

最初に封じたのは彼女の視覚、それと両腕だ。

若干の戸惑いを浮かべるも、千代女はそれを素直に受け入れる。視界は黒く遮られ、細

い手首には鋼色の手錠。ちょっと……いや、かなりイケナイ事をしている気分になったが、そんなの今に始まったことでもないだろう。

「それじゃ始めるよ」

「緊張……にござる。くのいちとはいえ、拙者……このような経験は——ひゃうっ！」

彼女のものとは思えぬ、可愛らしい悲鳴。

原因は明白だ。膝に乗せた少女……その胸にある突起を、予告なく触ったからである。

「ん、あっ……お館、様っ……♡　くう、ううんっ……いきなり、そのような弄り方をされ  
ては、拙者……ひああっ♡　あっ、やめっ……こんなっ、っ……おかひくなりますっ……  
」♡

背後から抱きしめるように腕を回し、忍び装束の隙間……脇の部分に手を挿入。

道なりに進めた先、奇妙に盛り上がった頂を刺激すると、少女が身体を震わせて苦しん

だ。

程よく硬さを孕んだその突起を、自分は夢中になって愛撫する。くりくりと先端部分を集中して苛める触り方に、たとえ目に見えずとも、何処を触られているかぐらいは彼女も分かっているだろう。

「はあ、んあっ……ひい、あうんっ……♡ あっ、あっ……お館様っ……♡ らめ、ですっ……乳首、くりくりって……このような仕打ちは、あまりにもっ……はああんんっ……♡」

予想とは違った「罰」の仕方に、激しく戸惑う千代女。

さしもの彼女も、こうした責めには慣れていない様子か。忍びとして痛みに耐える訓練はしてきたのだろうが、快楽に対する備えは皆無だったらしい。

「んっ、ふっ……お館様っ……お許しをっ……!」

「これは罰なんだから、慈悲を請うのはダメだよ」

「っ……んん、あああっ……♡ そんな、なあっ……あう、んっ……はっ、いやっ……だめっ♡」

少女の泣き言に対し、乳首への愛撫を更に強くする。

目も見えぬまま、男に好き勝手に弄られているのだ。弱音を吐きたくなくなる気持ちは分かる。が、これはあくまで罰であると……残念だが、手加減はしていられない。

「あんっ、ん、んうっ——はあ、はあっ……おやかた、さまっ……♡」

次第に、少女の口からは甘い声が漏れ出すようになっていた。

罰と分かっていても抑えられない……そんな、必死さの見える嬌声。

口はだらしなく広がり、涎が糸のように繋がっている。手を塞がれているため、満足に動くこともできず、逃げ場のない快楽が少女を襲う。

もちろん、こんなのは様子見……序盤の一手でしかない。周囲の見えない千代女には映らないが、俺が左手に取ったそれは、さらなる刺激として彼女を責め立てた。

「んっ——ああああっっ♡ お館、さまっ……♡ この振動は、いったいっ……♡」

嬌声が一段と激しくなる。千代女が驚いて声を上ずらせるには、軽快な振動音を鳴らす、奇妙なカプセル状の物体が理由だった。

天才キャスターから頂戴してきた性遺物の数々、その一つ。少女の乳首と同じ桜色をした物体。すなわち、ローターと呼ばれる代物。脇から潜り込ませたそれは無機質な振動を刻み、胸元で起立する小さな突起、敏感な先端部分を不意に刺激する。

「んあ、はああっ、これは、なんで、なんで、ござるかっ……♡ しゅごい振動が……拙者の胸を……揺らして……んんんっ!! はひっ、これえ……気持ち良いのが、止まらにゃっ……ンあっ、あっ、ふっ、うううんっ……♡」

医者が扱う聴診器の如く。

千代女の可愛らしい乳首……その周囲を、何度もローターで愛撫する。

慎重に、ゆっくりと。激しく責めはせず、焦らすかの如き快感を与える。こうした機械による愛撫は、全く未知の刺激として彼女を襲った事だろう。目が見えぬ事によって触覚

も研ぎ澄まされ、振動が余計に伝わっていたり……するのかもしれない。

「ひゃあ、っ、んんう……はあ、んはうっ……お館様あ……♡ これ以上は、もうっ……♡」

ローターの振動に翻弄される中、千代女の身体がぶるぶると震え出す。

もう既に限界が近いといった彼女の様子だが、まだまだ先は長い。

「っ……あっ、お館様っ……いったい何をっ……！ このような体勢……んっ、やああああ♡」

「千代女のここ……すっかり濡れてるね。罰なのに、感じてたのか？」

「やっ♡ あっ♡ 感じてなど、おらぬでござるっ……♡ 罰であるにも、かかわらず、快楽を感じるだなどっ……んっ、ふあっ、はっ……んんうっあっ、あああっ、ひあああっ♡」

それは台詞を打ち消すほどの衝撃。少女にとって不運？ だったのは、俺が持つ性遺物

とはローターのみ、ではないという事だった。

仰向けに押し倒された体勢。両腕は持ち上げられ、脇までが丸見えとなった状態。ローターは両の乳首に装着され、絶えず振動を鳴らしている。そんな辱めの姿勢に対し、

上半身への責めにも飽きた頃合いだろうと思い、俺はそれに手を伸ばした。

ローター同様、ピンク色をした奇妙な形の代物。一言で言うならそれは張型<sup>ディルド</sup>。勃起した陰茎を模したそれはぐねぐねと奇怪な動きを示し、少女の雌穴を無機質に苛めていた。

「くあ、ん、んんっ……おっ、んあっ……これえっ、はっ、ひあっ……すごいのが来てえっ……！  
 イッ、あっ……お館、様っ♡んっ、あうっ、おっ、あっ……♡止まり、ませぬっ……  
 ♡気持ち良いのが、拙者の中でっ……っううんんっ♡」

千代女が呂律も回らぬ様子で泣き喚くのは、他でもない、そのディルドが原因だった。仰向けに倒れた少女の下着を脱がし、愛液に濡れた陰部を晒す。それだけでも彼女には羞恥に耐えられない思いだったろうが、自身の秘所……綺麗な縦一スジに閉ざされている陰裂をこじ開けられ、膣内に巨大な異物が挿入されたのだ。どれだけの仕打ちだとしても、少女は目も見えぬままにそれを受け入れる。

「ひっ、いあっ、ああっ……♡ ナカが、ぐじゅぐじゅってされへっ……♡ あっ、んっ、あ、主の目の前、だというのに……こんな、姿……んっ、くうううっ……♡ 快楽に、溺れる姿をっ……おっ、ンあっ、はっ、ひにゃっ♡」

膣内を乱暴に攪拌する異物の感触。単なる張型というわけではなく、バイブレーション機能の付いたそれは少女の膣内を激しく愛撫する。

蜜液は掻き出され、全身が痙攣。口は閉じなくなり、涎が延々と。そんな紛う事なき痴態を晒しているにもかかわらず、少女の嬌声は収まる事をしない。

「お、お館、様っ……♡ はげひっ、くてっ……もう、ダメっ……で、ござるっ……♡ イッ……たっ、達してっ……はっ、はひっ……イッひゃっ……あっ、あんっはっ……♡」

微弱な振動を刻み続けるローターと、膣を蠢くバイブの存在。両方からの攻撃に、千代女の思考はすっかり蕩けてしまったようだ。

本当はもう少し色々道具を持って来ていたのだけれど……その必要は無い。というか、

そこまではきつと耐えられないだろう。存外、目隠しによって感覚が鋭くなりすぎていたのかもしれない。

だから、

「ッ……これで最後だ。安心してイッていいぞっ……!!」

「ひゃっ、はっ、はいっ……♡ 拙者も、もうっ、限界で……達し、ちゃっ……♡ あっ、はあっ、イキ、ますっ……♡ お館様っ、お館さまっ……♡」

必死に自分を呼ぶその声と従い、愛撫の勢いにスパートをかけた。

ローターの振動を最大に。膣道を走り回るバイブもまた強さを最高に、肉ヒダを突き穿つようにして刺激する。バイブによるストロークは面白いように愛液を掻き出し、同時に、我慢という名の堰を破壊する致命の一手となったようだ。

瞬間、少女の全身が激しく暴れ――、

「んっ、くうんんんっ――!! あっ、いやっ、見ちゃ、だめっ……!!」

千代女の身体が盛大に跳ね上がる。

その瞬間、彼女の秘所からはぷしゃあつ、と勢いよく潮が吹き出された。

これ以上ない絶頂の証拠……だらしなく緩んだ口元と小刻みに震える全身がそれを裏付ける。ピークが過ぎた後でも少女の身体はビクンと揺れ動き、いまだ快樂の波を漂っている事が見て取れた。

我ながら、背徳感が凄まじい。いまだ子供にすぎない彼女を目隠しに、両手を封じ、卑猥な機械を以てイカせたとあつては……うん、やってしまった感がすごい。

「はあ……はあ……ん、あつ……お館、さま……?」

弱々しく震える少女の目隠し、それに手錠を取ってやる。

泣き出す寸前の赤子のような瞳だった。思わず抱きしめたくなるほどに愛らしい……普段の姿とは正反対な、何処にでもいるような少女としての素顔。息が荒く、身体は熱を帯びていく。気が付くと、自分の意識は彼女そのものを求め出し、荒ぶる衝動のままに少女を勢いよく押し倒していた。

「千代女……!」

「お、お館様……!?!? い、いけませぬっ……!!  
拙者はお館様の僕であり……こっ、この  
ような関係は許されぬ、と言いますか……!!」

悪いが、もう我慢はできない。お前が欲しい。

絶頂の余韻に浸る少女を再度ベッドに押し倒し、そう伝えた。

しかし、許されない……とはどういう事だろう。いやだ、できない、断るといふのなら分かる。少女の反応は何処となく違和感だ。

「……拙者として、主君に身命を捧げた僕にごさる……主が欲するところ、それを拒む資格はありません。夜伽も一つの任務にございましょう」

ですが、と千代女は続けて。

「それは肉欲の捌け口として利用されるにすぎませぬ。欲しいなどとは言いなさらぬよう、お館様。そのような寵愛……拙者には不要でござる」

寂しそうに少女は語る。

忍び……主命に生きる者として、愛を以て求められるわけにはいかぬのだと。だからこそその拒絶。許されないと云った事への真相だ。

だから、自分は……………

▶情熱的に抱きしめる

優しくそっと抱きしめる

「お、おとおおお館様っ……………!? 拙者の話を聞いていたでござるか……………!?」

ああ、もちろん聞いていた。だが、それが何だと言うのだ。

主君だとか、僕だとか、そんな事はどうでもいい。俺は男として、彼女という女が欲しいと言っている。許されるとか許されないとか……思いの前には実に些末な問題だ。

「……お館様は卑怯にごさる。そのような言い方をされては……拒めぬではありませんか……」

その言葉が決め手だった。

彼女の身体をベッドに寝かせ、静かに衣装を解いてやる。現れたのは、少女の瑞々しい肉体だ。覆い被さるようにして重なり、恥ずかしそうに身体を隠されて、

「あまり見ないでほしい、でござる。呪詛の瘡が刻まれしこの身体……気味悪く……んむう!？」

そんな事はない。自信無さげに目を逸らした千代女の唇を、強引に奪い取る。

「んっ……む、んちゅ……ふう、うむ……くちゅ、ちゅぷ、あむっ……ん、んっ……♡はむっ……ん、れろっ……ちゅ……んあ……ん、んじゅっ……ぢゆる、んちゅ♡」

「千代女の身体、すごく綺麗だよ……」

「んう、つう……お、お館様は数奇者にごござるっ……！拙者のようになつまらぬ女を、き、綺麗だなどと……んうんんっ……！？んっ、うむっ、ふううんっ……！」

突然の口づけ。初めは動揺し、ただ目を白黒させるだけの千代女だったが、その表情は次第に幸せそうな……至福な色に変わっていった。

「んん、っ……ふぁ……！お、お館様と……口づけを……拙者はもう、忍び失格にござる。烏澁がましいとは理解しているのに……もう貴方様から離れられませぬ……」

長く濃厚な接触から解放されると、千代女が愛おし気にこちらを見つめてきた。

その瞳に応えてやりたいと、思いが一気に爆発する。彼女の両脚を軽く持ち上げ、ゆっくりと準備をした。少女も恥ずかしそうに、けれど、素直に股間を広げ。

「それじゃあ、いくよ……」

「はい、我が主……どうか、このまま……許されぬものだとしても、貴方様の愛がほしいで

「いざる。できれば、その……優しくして……」

ゾクゾクと背筋を衝動が駆け抜ける。ああ、その言い方は卑怯だった。

「くっああっ……お館、様っ……♡」

無防備に晒された陰部……毛の一本として生えていない綺麗なスジ。

すっかり大きくなってしまった自らのものを、愛液に濡れたそこに押し付ける。挿入は目前だ。今まさに己の中に侵入される瞬間を、少女はまじまじと見つめて――。

「う、んっ――あっ、はああああああっ……！！ お館様っ……あっ、くうんっ、ッ、はあ、あっ……奥まで、入って……来たあ……♡ 拙者のなかにい……んう、ああっ……」

挿入。嬌声が鳴る。彼女が見つめるその手前、肉棒は少女の雌穴を容易く貫いた。

「あうんっ、やあっ……っ、ふゆあああっ♡ お館様っ……あんっ、はげひっ……奥、ごり、ごりって……♡ 壊れ、ひゃっ……いつ、ひあんっ、んっ、きああっ……んう、あああ  
んっ♡」

「っ……気持ちいいっ……！ 千代女の膣内、温かくてっ……！」

「あっあ、っ、ひっ……んくっ、はう……ダメ、でござるっ……♡ 恥ずかし、っ……あっ、んひゃっ、はうっあうっ……余計に、感じちやっ……きゅあっ、はっ、んああっ♡」

腰の運動に合わせて、肉棒が激しく蹂躪する。

狭く、浅い、そして程よい熱に包まれた空間だった。膣壁はぎゅうぎゅうと肉棒にしがみついてきて……下の口、という奴だろうか。大人しい彼女のものとは思えない積極的な締め付けに、挿入を始めて数秒、自分は我を失ったように腰を振り続けていた。

「ふくううっ、あ、あっ、あうっ……ふかっ……やっ、うつく、っ……これっ、知りませぬ……♡ こんなに、すごいのっ……初めてでっ……あっんあ、お館……さまあっ……♡」

もっ……もっ……もっ……、してくださ……っ、んんっはああんっ♡

突く、引く、突く。ペース配分を考えないようなストロークに、千代女がより一層激しく求め出す。恥ずかしさを残すものの、押し寄せる快楽には勝てぬようだ。

「あっ、あんっ、んっ……お館、様っ……♡」

恍惚とした様子。潤んだ瞳で見上げてくる千代女。  
だから、ちょっととした嗜虐心。耳元で囁くようにしてからかってみる。

「淫乱だな、千代女は……こんなに濡らして……！」

「ん……あ、っ、あ……♡ 拙者……断じて、淫乱、などではっ……♡」

「ちんぽ入れられて、こんなに喜んでいるのか？」

「そ、それはっ……ん、ひいうんっ……♡ お館様……だからでござる、お館様以外でこんなに感じる事は……絶対に、ありませぬっ……！ このちんぽだけっ、このおちんぽだけでござる、からあっ……！」

本気にしたのか、千代女は必死になって泣き叫ぶ。卑猥な台詞とも相まって、ゾクゾクと黒い思いが込み上げてきた。

「そんな事いって……本当は誰のでも良いんだろ？」

「ひゃ、あっ……違っ、あくっ……♡ 拙者のおまんこはっ、お館様専用でござるっ……♡」

「こんなにチョロインじゃあ、信用できないな……」

「んあっ……信じてほしい、でござるっ……♡ こんな声を出すのも、腰を振るのもっ、お館様だけありまするっ……♡ お館様あ……んくっ、ああっ、はあああっ……♡」

流石に苛めすぎたと思い、お詫びとばかりに、膣奥を強く打ち叩いた。

彼女の忠義が本物である事など、俺が一番よく分かっている。だけど……何ていうか、苛めたい。そして、とにかく愛でたい。何故か分からないが、千代女を見ているとそんな気持ちになつてくるのだ。

「可愛いよ、可愛いっ……！　ちんぽ入れられて喜んでる千代女の顔……すごく可愛い！」

「にゃああ、んあっ……ひぐっ、くひい……っ、お館様、お館様あ♡　子宮がっ……おちんぽにたくさん突かれてっ……んっ、ふっ、開いちゃ、う……お館様のおちんぽでっ……拙者の奥ッ、こじ開けられてるっ……♡」

幼い膣穴を何度も苛める度に、少女の声は甘くピンク色にトロけていく。

まるで快楽の虜だ。真面目な彼女が乱れる姿というのは新鮮で……そられる思いがある。涙で潤んでいるのに、不思議に幸せそうな……そんな瞳。この可愛くて健気なサーヴァントに、どうにか褒美を与えてやりたいと、腰が思うがままに加速する。

「イツ、あつ……♡ お館様、もう耐えられませぬっ……♡ これ以上は……んっ、く、あはっ……イク、でござるっ……♡ しゅご、くてっ……大きい、のがっ……ひああ、あつ、拙者のおまんこの中でっ……弾けちゃっ……あっんあ、はあ、っ、ううううっ……♡」

激しい腰のピストン。膣道を乱暴に走り回る肉棒。より一層強さを増した挿挿に、千代目が限界を泣き叫ぶ。表情は緩み切り、ただただ快楽を喘ぐようになった状態。

自分としても、肉棒が大きく膨らむのを感じ取った。射精。欲望が爆発する。この滾る思いを全て少女にぶつけたいと感じた。

「千代女、出すぞっ……！ ぜんぶ、お前の中になっ……！」

「中、はっ……ん、はあんっ、あ、あっ……♡」

「出したい、お前の中になっ……！」

「は、はいい……♡ お館様の精子、子種っ……千代女の子宮に、ぜんぶ吐き出してくだひゃ

いっ………♡　ぎゅってしてっ………孕むぐらいっ、いっぱい射精してほしいでござるっ………♡」

腕を回し、足を絡め。少女が膣全体を使って締め付けてくる。

言葉だけでなく、全身で「孕ませてほしい」と言ってきたようだった。

そんなおねだりに、肉棒は一瞬で限界を迎える。これまで散々いじわるな事してきた……そのせめてものお詫びだ。全身全霊。本気の思いでぶちまけよう。

——ビュッ、ビュウウウウ、ビュルルルルルッ!!

「はっ、あああああっつ——♡♡♡　あっあっ♡　あっ♡　ンあ♡　出てるっ………でござる♡　お館様の精液……拙者のおまんこの奥にい………どびゅどびゅうってえ………♡は、ひ………イッひやいました………幸せに、ござる………♡」

少女が絶頂に揺れる中、自身もまた大量の白濁液をその奥に放出していた。

深く抱きしめ合った状態での射精。千代女の身体は反り返り、抑えてやれねば暴れそう

なほどにビクビクと震えている。彼女にしては弱弱しく、俺に頼り切らねばならぬほどに朦朧としている様子だった。

「千代女……」

「……この御恩は一生忘れませぬ、お館様……至らぬ忍びをここまで重用してくださり、こうして、愛してもいただけるとは……」

吹けば消えてしまいそうなほどに薄弱とした声で、少女が耳元で囁いてくる。

「後悔はさせませぬ、絶対に……身命を賭して、貴方様の期待に応えてみせます……」

そう言って、彼女の身体が完全に力を失い寄りかかってきた。

何度か呼んでみるものの、反応はない。力尽きて眠ってしまったのだろう。

その身体をベッドにそっと寝かせると共に、風邪をひかぬよう、布団をかけてやる。綺麗な寝顔だった。その安らかな様子に一言……自分も、よろしく、とだけ声を掛けた。

∞  
∞  
∞  
∞  
∞  
∞

後日。

「失礼するでござる、お館様」

「ん？ ああ、千代女か。入っていいよ」

扉が静かに開かれ、自身を「お館様」と呼ぶ唯一のサーヴァントが姿を見せた。

二つに束ねた黒髪が特徴の、忍び風の女の子だ。いや、風と言ってはマズいか。彼女は  
真正正銘の忍び……女忍者であるのだから。

71 「今日の ” みっしょん ” ……拙者の戦いぶりは如何でござったか。忌憚なき意見が欲しい

でいやる」

相変わらずの膝をつく姿勢で戦いの感想……評価を仰ぐ千代女。

して、肝心の戦いについてだが……特に指摘する所のない、完璧な戦いぶりだったと言えるだろう。褒めこそすれ、叱る要素なんて一つもない……順調な立ち回りだった。

「そ、そうでござるか……お館様の目に見ても、拙者は良かったと……」

俺が思った通りの感想を告げると、千代女は少し難しい表情をした。

何故だろう。褒めたはずなのに、あまり喜ばれていない。何かが不満だったのなら、どうか気にせず言ってくれ。

「い、いえっ……!! これは、拙者の問題と言いまするか……!!」

そう言うと、少女は顔を赤くして。

「お館様は……その、拙者に……罰を与える気はないでござるか？」

「……罰？」

そりゃあまあ……罰というのは何らかの失敗に与えるものであって、何も問題が無ければ当然、与えるという事はしなくなる。心配しなくても、今の千代女が罰を受けるような事なんて――。

「――！！」

と、そこで気が付いた。

もじもじと身体を揺らして、頬を赤らめた……物欲しげな少女がいることに。

「時にお館様……先日、拙者が罰をいただいた際……あの場には、まだまだ数多くの面妖なからくり仕掛けがあったと記憶しているでござるが……」

「え？ あ、ああ、そうだね。使わなかったのもいくつか……」

「で、であれば——提案にござる、お館様！」

途端、少女が勢いよく詰め寄ってきて。

「も……もし、あれらの仕掛けを試したいと……そう思う事があれば……せ、拙者で試してくれても構わぬでござる！ 僕として当然の事ゆえ……約束、約束でござるぞ！」

「……………」

見た事のない熱量の彼女に圧倒され、自然、言葉を失った。

どうやら、色んな意味で彼女にはまだ「罰」が必要であるらしい。

# 霊基No.14 舌斬り雀の紅閻魔



## PROFILE

身長：130cm 体重：??kg

『舌切り雀』の名を冠する少女剣士。  
とにかくご奉仕させてほしい。

魔力供給回数：202回 絶頂回数：245回  
好きな体位：対面座位 処女喪失日：召喚から28日目

妊娠確率：82%【危険日】

『ご主人に愛されるなんて紅は幸せ者でち。  
これからもしっかり奉仕させていただきますまぢゅね、マスター』

## STATUS

絆LV 100   
Next 0

性欲：C	☆☆☆☆☆	知力：A+	☆☆☆☆☆
体力：C	☆☆☆☆☆	母性：A+	☆☆☆☆☆
従順：A	☆☆☆☆☆	反抗：E	☆☆☆☆☆
淫乱：E	☆☆☆☆☆	感度：A	☆☆☆☆☆

『ご主人の健康を管理するのもサーヴァントの務めでち。  
溜めすぎは良くないでちよ』

# 霊基No.14 舌斬り雀の紅閨魔



## SECRET GARDEN EX

### SG1：料理道・八大地獄

料理に対して並々ならぬ情熱と知識技量を持っている。花嫁修行として彼女の教室を受講する者は多くいるが、まだ誰もクリアできていない。

### SG2：ワーカホリック

身に染み付いた社畜体質。働くことが生き甲斐であり、休みを貰えると困惑する。  
「急なお休みなんて何をしたらいいかわからないでち。え？ じゃあ一日中×××して……チチュン！！」

### SG3：愛妻願望

奉仕が大好きな彼女は、一番近くでマスターのお世話がしたいと願っている。  
「朝餉も夜伽もあちぎに任せるでち。だって紅はご主人の……ち、ちゅまでちから！」

## WEAK POINT

### mouth：★★★★★

奉仕好きな彼女による、毎朝？の日課のフェラチオ。一日は紅閨魔の口淫から始まると言っても過言ではない。

### arm：★★★★☆☆

包丁捌きなどで鍛えたきめ細やかな指使い。「どうでちかご主人？」と上目遣いでされる手コキはまさに至福の味わい。

### vagina：★★★★☆☆

見た目通り小さく柔らかな膣内。子宮口をノックしながらそこがどんな場所か聞くと「ご主人の赤ちゃんを孕むための場所でち」としっかり答えてくれる。

## LIVE



状態：♥♥♥

しっかり者の紅閨魔は子作りにも精を出す。「セックス頑張るでち！」

——マイルーム。

カルデアの朝は早い。

とりわけ朝食の準備を一手に担う彼女にとって、寝坊しがちなマスターを起こしに来ることなど最早日課のそれとなっていた。

「朝でちよ、ご主人。いい加減、起きないといけまっちゃん」

慣れた感じでマスターを呼び起こす少女。

日本民話に名高りし『舌斬り雀』、その名を冠する少女剣士。

閻魔亭を預かる若女将にして、カルデアお料理教室のちびっこ教官。——紅閻魔。

朝食の支度を終えた彼女は、いつもの通り、マスターの自室を訪れていた。

当のマスターはと云うと、やはり深い眠りの中にいるらしい。こうして呼び掛けてはみたが、それでも起きようとはしない。

「もう少し休ませたいところですが——仕方ありません。マスターたるもの、規則正しい生活が必要でち。しっかり朝ごはんを食べて、しっかり精力をつけてもらいまちえんと」

なので、と紅閻魔は手を伸ばして。

「少々強引でちが、お布団から引きずり出せば自然と目も覚めるもの。それでは失礼して。これを、こうして——チチュン!？」

徐に布団を剥がした紅閻魔の、少女の口から驚きの声が漏れる。

驚愕するのも無理はない。少年の眠る中、布団を剥がしたそこに現れた奇妙な『山』。マスターである彼の履くズボンの中で、力強く存在を主張している『それ』を見た瞬間、まるで鳩が——否、雀が豆鉄砲を喰らったような衝撃に襲われたのだ。

「こ、これはご主人の……! ……そうでちね、マスターも健全な男子でち。寧ろ健康体であることの証左に違いありません。少々、驚きはしまちたが……」

少女は喉を鳴らす。

いまだ威勢よく屹立する不可思議な膨らみ。

男性にとつての生理現象でもあるそれは、知識としては所有するものの、実際に目の当たりにするのは初めてだったのだろう。

思わず布団を掛けなおそうとするが——いや待て、これは放っておいてよいものなのか？

紅閨魔は考える。

世話焼きで、しっかり者でもある彼女のことだ。マスターのことをと思えば、無視が出来なかったのかもしれない。

「し、仕方ありませんね。カルデアの女将たるもの、マスターの健康管理も大切な役目です。ご主人が起きる前に素早く始めるでち！」

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「ん……………」

なんだか下半身がむず痒い。そう感じて目を覚ます。

「ちゅ……………ぺろぺろ……………♡ レロっ……………ん♡」

いや、明らかに何かがおかしい。何かが起きている。

下半身を襲う不思議な違和感を察し、勢いよく布団を引きはがした。——すると。

「ん……………あ、起きたのでちね、ご主人。おはようでち、今日も良い朝でちね♡」

「紅閻魔！？ な、なんでここに……………ていうか何をして——！！」

そこにいたのは、小柄な赤い髪の少女だった。

燕雀抜刀術の使い手。セイバーのサーヴァントとしてカルデアに召喚された英霊・紅閻魔。

尤も、彼女がこうして自分を起こしに来ること自体は珍しくなく、寧ろ日常的なことなので驚きは無いが——。

「ふ、んんっ……♡ ちゆる、ちゅぷ……んちゅ♡」

まるで忍び込むように布団に隠れていた少女が相手にしているもの。

それは、お馴染みの生理現象により勃起を果たしていた自らの愚息に違いなかった。

紅閻魔は、それを丁寧にあ撫していく。

屹立した陰茎を細く滑らかな指先で抜き、その小さな口に含んでは、まるで吸い出すよう繰り返される口淫。

料理さながらの慣れた手つきで行われる愛撫に、目覚めたばかりの自分の身体は突き刺すような刺激に襲われていた。

(も、もしかして夢……まだ眠りの中とか——?)

思わずそんな考えすら浮かんでくる。

だが、これは間違いない現実だった。あまりに至福な、極大な快感に満たされているとはいえ、徐々にカタチを取り戻していった思考は、これを紛れもない現実だと主張していた。

「なんで、こんな——」

「ぶあ……マスターが、いけないのでちよ。お寝坊さんなご主人を起こすには、こうするの  
が一番でちからね。あむ……ん、んちゅ……はむ、れろっ……じゅる、じゅぷ、ずちゅ♡」

いたずらな笑みを見せた少女は、尚も肉棒を口に啞え・舐め回していく。

「ん、ちゅ、ちゅうう……♡　じゅるる、じゅぶう……んむ、れろお、ぺろっ……♡」

愛らしい外見とは裏腹に、男の弱点ツボを知り尽くしているが如き口淫だ。

おそろくは、毎朝のように起こしに来てくれた彼女が、自分のそれを見かねて、性欲処

理という名の任務を買って出てくれただけのことなのだろう。

律儀というか、それ自体は紅閻魔らしい気遣いである。

しかし、見た目が幼女に変わらないサーヴァントにされている事実は、背徳感も相まって単なる性欲処理では済まないほどの快感を生み出していた。あるいは、普段のしっかり者である彼女とは相反した淫靡な印象のせいもあって、肉棒は更に一段と硬さと太さを増していく。

「ぢゆるるるル、ぢゅぶ、ぢゅぶ……んあ、ご主人……どうでちか？　紅のご奉仕、ちゃんと気持ちよく出来てまちゅか？」

ああ、それは問題ない。寧ろ気持ち良すぎるくらいだ。

「それは良かったでちゅ♪　では、もっともっと気持ちよくしてあげまちゅからね♡  
じゆるるっ、ぶじゅ、れるっ、んぢゅううう……♡」

素直な、ありのままの感想を告げる。

すると、それが余程に嬉しかったのか、少女の口淫は更に激しさを増していった。

「れろっ、えろっ、んちゅ♡ んむう、ちゅぱ……ずちゅ、ちゅル、じゅぷう……♡」

それにしても、驚くべきは紅閻魔の奉仕の技術だ。

英霊としての彼女は、その逸話である『舌切り雀』の影響もあって舌が無い。

正確には舌を切り落とされているため、舌を使った愛撫は必然として不得手……儘なら  
ないものだと思ひ込んでいた。が、それは間違いだと思ひ付かされる。

「じゅぶぶっ、ちゅずるる……んんっ♡ ごしゅ、じん……ふあ……あむ、ん……れるっ、  
ちゅろお、んちゅ、ずちゅう、じゅぼ、じゅぶっ……♡」

懸命に頭を上下に振り、喉の奥まで使って刺激する紅閻魔。

足りない技術は努力で以て埋める、そうした気概を感じさせる口淫だ。

「ヂュル、ちゅぶっ♡ んあ……はあ、はあ……あむ——ちゅ♡ んちゅ♡ ぺろぺ

ろっ♡」

亀頭をついばむように口づけされ、もどかしくも鋭利な刺激に腰が震えてくる。

「ふぁ……ご主人の、おちんちん……ピクピク、って動いたでち……♡」

どうやら自分のそんな反応も、彼女には筒抜けだったらしい。

刻一刻と限界が迫りつつある自分の肉棒を見て、少女は嬉しそうに破顔する。

まるで努力が実を結んだような、勉強した甲斐があったと喜ぶような、そんな喜びようである。真面目な彼女のことだ。神業の如き舌技も、その習得には多大な研鑽を必要としたのだろう。

「ここが、気持ち良いのでちね……♡ んっ……ちゆるる、ちゅぶ、ちゅうう……♡」

そう言って、紅閻魔が唇を滑らせていく。

陰茎の根本から亀頭に掛けて、裏筋をなぞるように。

やがて頂点に達したその時には、小刻みで素早い——それこそ餌をついばむ雀のような——そんな動きで以て、俺を絶頂へと導いていく。

射精は目前、最早それは数秒先の事実と思われた。

紅閻魔の口腔奉仕はそれほどまでに強力で、それを表情に出した瞬間。

「じゅるっ、じゅぶるる、れろっ、んぢゅうう……♡ マスター、限界なら……出していい……でちよ♡ んっ……紅の口の中に……マスターの朝一番の濃い精液……いっっぱい射精して大丈夫でち、だから……♡」

少女のフェラチオが一層加速する。

まるでおねだりするようなセリフに、限界はいとも容易く訪れた。

「ぢゅぶ♡ ぢゅぶ♡ じゅぶ、じゅぼっ♡ すぢゅるるるるッ♡」

それを察した紅閻魔は、口を窄め、肉棒を喉奥まで咥え込む。

自分は自然と彼女の頭を抑え込み、脳裏に始める快樂の火花に痺れつつ、股間に力を込

めた。

そして――。

――ビュルルルツツ！　びゅっ！　ドビュ、びゅうっ！　ビュク、ビュウウウっ！！

「んんっ……！！　ん、んくっ……コク、ゴクっ……ぷぁ♡　これが……ごひゅ、じん、の……♡　ん……まだ、出てる……でち♡　あむ……んちゅ、ちゅう、ぢゅううう♡」

強烈な解放感――下半身を疾走する快楽に身を任せ、暴発したそれは、少女の口内を瞬く間に白で満たしていった。

ビクン、ビクン、と。

軽快なリズムを刻み訪れる射精を、紅閻魔は余すことなく飲み干していく。

おそらくは呼吸も苦しくなるだろうその量に一切怖気づくことなく、やがて興奮が鎮まるその時まで、少女の口は肉棒を力強く啜え込んで離さなかった。

「はぁ……はぁ……すごい、たくさん出ましたね、ますたー♡　健康な証拠でち。こんなに

たくさん出ちてくれて、紅も嬉しいでち！」

満面の笑みで喜ぶ紅閻魔。

こちらこそ礼を言わねばならないだろう。

朝早くに起こしに来てくれて、尚且つ自分の生理現象でしかないそれをわざわざ鎮めてくれたのだ。感謝の言葉も思い浮かばないほどである。

「気にする必要はありませんよ。これも女将の務め、紅がしたくてしてることではちから♡」

……何処まで可愛いんだ、このロリサーヴァントは。

健気で親切で、そして愛らしさ満点の少女に対し、自分の衝動は収まるところを知らなく。

91 「さ、着替えたら食堂へ行きまぢゅよ、マスター。もうとっくに朝食の準備は出来ているのでち。早くしないと冷めてしまいまぢゅ」

だから、そう。

彼女には非常に申し訳なく、どうしようもないことではあるのだが。

可愛すぎるこの幼女英霊を前にして、ただの一回の射精でどうして満たされようか。そんな  
思いを証明するべく、射精したばかりのはずの肉棒は既に硬さを取り戻し、そして――  
迸る衝動は、少女に向かって勢いよく発散された。

「紅閻魔！」

「チチュン!?!」

小さな体軀をベッドに押し倒し、その上を力任せに征服する。

突然の出来事に紅閻魔は目を丸くし、目の前に現れた一匹の獣に身体を震わせていた。

「ごごご主人!?! 急にどうしたのてちか!?! ……え、あちきが欲しい? まだしたい?」

嘘偽りない本心を告げる。

射精したばかりの陰茎が、尚も屹立して訴える衝動——すなわち、彼女と繋がりたいという事実。

それを果たさずしては、満足とは言えない。

もし彼女が自分の性欲処理を買って出なければ、あるいは抑えられたのだろうか……こうなってしまうのは仕方が無い。この衝動を抑え込む術を俺は知らなかった。

「でちが、朝食が——せっかくの朝餉あさげが、冷めてしまいうでち……！」

それは本当に申し訳ない。

紅閻魔が丹精込めて作ってくれている料理。カルデアの食堂係として毎日用意してくれているその朝食は、出来れば温かいうちに食したいのが本音だ。

だが、今はそれ以上に強く紅閻魔自身が欲しい。

食欲よりも性欲だ。朝食はその後でいただく。

「はあ……まったく、ご主人の性欲は大したものでちね。でちが、これも人理を救う唯一な

るマスターたりしと思えば、見誤った紅がいけまちなね」

呆れたように呟く紅閻魔。

しかし、すぐに優しく笑みを作って。

「いいでちよ、マスター。あちきで良ければ、その衝動……受け止めてあげるでち」

両手を伸ばし、まるで迎え入れるように少女が微笑む。

ああその笑顔は卑怯だった。今か今かと待ちわびていた本能が一気に爆発する。

「ん——あ、ご主人……♡」

押し倒した少女の股下に手を伸ばし、そっと撫ぜるようにして指を這わす。

「紅閻魔のここ……濡れてる」

「そんな、ことは——ん、ちゅんっ♡んやっ、ます……たぁ……!!」

淡い淫裂。下着の上からそのスジをなぞると、かすかに湿っていることが確認できた。紅閨魔は否定してみせるが、彼女も先ほどの口淫で興奮していたのだろう。

その証拠に、少し弄っただけでまるで堰を切ったように愛液が滲みだしていた。少女の快楽の象徴。下着の上からでも分かる蜜液の量に、自然、頬が緩んでしまう。

「……脱がすぞ」

「はぁ、ん……マスター……♡ 恥ずかしい、でち……♡」

下着を脱がすと、てらてらと濡れた少女の陰部が現れた。

紅閨魔は恥ずかしそうに目を瞑るが、抵抗しない様子を見るに、覚悟を決めているものと思われる。だから自分も——なんら躊躇することなく手を進めていく。

「ご主人……紅の、変……ではない、でちか？」

不安そうに漏れ出した質問に「ああ」と短く答えた。

少女がいまだ少女であることの証拠。綺麗な縦スジ。一筋の亀裂。それを指で開いてみせると、涎のように愛液を垂らす桜色の花卉が開かれる。

小さく、柔らかく、可愛らしい。

幼女同然の淫裂はひくひくと震え、その小さな虚空で以てこちらを誘惑していた。だから、誘われるがままに肉棒をあてがって――。

(ああ――ご主人のが――紅の、膣な内に――)

恐る恐る少女が目を向ける先で、亀頭がやがて進んでいく先は――。

「ツ――ん、あ――くうう、んっ……は、あああんツ……!!」

薄い壁を貫く感触。

前戯も不十分なほどに濡れそぼっていた彼女の膣口は、容易く肉棒を受け入れた。

「大丈夫か、紅閻魔……？」

「ちゅ、ちゅん……♡ 少し驚いただけでち……問題ありまぢえん♡」

そうは言っているが、やはり苦しいのだろう。

この体躯にして、この膣内の狭さだ。男のモノを受け入れた衝撃に、紅閻魔は片目をギュッと閉じて必死に耐えている様子を見せていた。

膣内への侵入を果たした肉棒を、少女の媚肉は拒むように締め付けてくる。

ただその感触に、思わず達してしまいそうな快感が押し寄せる。

「ご主人、良い、でちよ……♡ 紅の膣内で、いっぱい気持ちよくなっほしいでち……♡」

心得た、と首を縦に振る。

懸命に笑顔を作ってみせた少女に、せめても彼女を気持ちよくさせようと動き出す。

そして――。

「う——あ、ああっ……ふあ、ああんッ……♡ はう、んんっ……っ、ひあっ♡」

ゆっくりと、かつ、連続的に。

少女の幼い洞穴へ、肉棒の抽挿がスタートする。

「ん、ああ……ごしゅ、じんっ……♡ はあん、あっ……やっ、あッ……奥、まで……♡」

ご主人のが……紅の、腔内で……ん、ッ……暴れてる、でちっ……ん、やんっ、あ、あっ♡」

少女の可愛らしい唇から、聞いたことのないような嬌声が零れだす。

規則礼節を重んじ、若女将として働く彼女の姿からは到底想像の出来ない……そんな艶やかな一面を露呈した紅閻魔に、そんな一面を自分の手によって明らかにした事実には、興奮を覚えないワケがない。

興奮は肉棒を伝わり、更なる抽挿として少女の腔壁を突き上げる。

穿ち、抜き、貫き、引き——。

少女の秘所はすっかり陰茎を啜え込み、強く締め付けて離さない。

「はぁあんっ……あぁ、んう……ん、はう……♡ あ、やっ……♡ ごしゅ、じ  
んぁ♡」

ほんのりと涙を浮かべて、快楽に泣き叫ぶ紅閻魔。

「ひゃう、っ……んぐう、はぁん、ん、あぁっ——んっ、ふう……♡」

あの紅閻魔がこんなにも乱れている——そのことに激しい興奮が沸き上がる。  
 だらしなく口を開いた表情は普段の彼女からは到底想像できないものだし、火照った相  
 貌は外見の幼さとは相反した艶やかさに満ちている。

「あ♡ あっ♡ はぁ、あぁッ——♡ やぁ、はっ、んんっ、あぁんっ……♡ ます、たっ……  
 おかひく、なっちゃ……くひっ、あんっ、あッ……そこっ、トントン、しちや……ダメ、で  
 ちっ……♡」

ダメ、とは言うが……紅閻魔の膣肉は、まるで欲しがるように吸い付いてくる。その体軀ゆえ、最奥へ到達することなどワケもなく。

少女の膣奥を——彼女にとっての最深部を、子宮を攻めると、甲高い悲鳴が漏れた。パン、パン、パンっ。

律動を激しくしていくにつれて紅閻魔の膣内は潤いを増し、結合部から液と液とが際限なく弾け飛ぶ。淫らな音をたて滴り落ちていく光景を視界の隅に、少女の内部を更に奥深く攻撃する。

「はあ、んッ……んああっ♡ なんども、当たってえ……ご主人の、おちんぼ、が……♡ 紅のいちばん、よわい、とこっ……グリグリ、当たってる、でちっ……くひゃうッ♡」

おぼつかない眼差しで何処かを見つめる紅閻魔。

彼女の急所らしい部分を執拗に攻めたせいで、意識も判然としない様子だ。

「マス、ター……♡」

「？」

そんな中、ハッキリとしない様子で少女が尋ねるには。

「紅の、おまんこ……ちゃんと、気持ち良いでちか……？ あちき、ばかりっ……気持ちよくなって、いまちえん、か……？ んんっ、ふぁ、あっ、んあぁ♡」

「ああ、当然だ……！ 気持ち良すぎるくらいだ！」

「んっ……良かったでち……♡ もっと……もっと、紅で気持ち良くなって、くだちゃい……♡  
紅も……ご主人が気持ち良いと……嬉しい、でち……んあ♡」

——まったく、このサーヴァントは何処までも。

情事の最中であって尚、マスターを大事に思ってくれている少女の健気さに苦笑する。

こんな時くらい、自分の快楽を一番に追いかけていけばいいだろうに。

だから——その献身には、全力で応えてやらねばなるまい。

最奥をつんざく肉棒の抽挿に一段と力を込め、少女の子宮口を幾度となく攻め立てる。無垢で誠実な少女に、女の悦びを教え込む。

ただ——そう。深奥からの愛情が、もっと気持ちよくさせてやりたいという思いが、果敢に前後する腰の律動に、渾身を注ぎ込んでいた。

「好きだ、紅閻魔……！　いつものしっかりした君も、へろへろになってる今の君も……！」

「ア、ツ——紅、も……♡　紅も、ご主人がちゆき、大ちゆきでち……♡　あ、あ♡　おちんちん、もっどっ……♡　紅の、おまんこにツ——もっど、欲しい、でちっ……♡」

愛情を確かめ合うように叫び合う。

その一言一言が、互いの限界を証明するようだった。

「♡　ごひゅじっ……もうダメ、でちっ……♡　おまんこ、限界で……イッて、しまいまちゅ……♡」

もはや余裕は無いと、紅閻魔が縋るように泣き叫ぶ。

それは自分も同じことで、抽挿の度に陰茎を欲望が込み上げていくのが分かった。

「あ、やつ……あああんっ……♡ きて……はやく、っ……♡ いっぱい、びゅーって……♡  
♡ 紅の膣内に、ご主人のあちゅいの、ほしい……でち♡」

おねだりするセリフと共に、少女が膣口を締め上げる。

舌足らずなその懇願は、自分の中にあつた最後の理性すら破壊した。

ずちゅ、ずぶっ、じゅぶっ。

紅閻魔の未熟な膣内を、これでもかと蹂躪する。

既に発射のカウントダウンを始めた肉棒は、最後のスパートを掛けて——加速。欲望の一切合切を彼女の膣奥で吐き出すべく、子宮口を何度もつんざいた。

このサーヴァントを孕ませる——そんな覚悟、意気込み。

幼女の膣奥に射精する禁断の想像に、背徳感に、ただただ腰を振り抜いて。

「ッ……射精すぞ……！ 子作りするぞ、紅閨魔！」

「はっ♡ ああんっ♡ は、はひっ……こづくり、しまちゅ……♡ ますたーと、こづくり  
せつくちゅ……♡ 紅の、おまんこに……ちっちゃい、おまんこに……種付けしてえ♡」

上から押し潰すように。

全身でしがみつくように。

互いに深く密着した姿勢で訪れた最後の瞬間。

一際強く少女の最奥を貫いた刹那——。

——ビクンツ、ビクツ、ビュルツ、ビウビウウウツツ！！

「あう、ふあ、あ……♡ でて、りゅっ……おくっ……あちゅい、のが……びゅっ、って……  
ん、あッ、はっんあ、ごひゅじんの、せーえきっ……あっ♡ あーっ♡」

堰き止められていた欲望は、放たれたが最後、全てがそこに解放された。

腰が碎ける快感の前に意識が明滅する。  
それは少女も同じようで、けれども潤んだ瞳でこちらを見つめ、呟いた。

「はあ……はあ……うれしい、でち……♡ いっぱい、出ちてくれまちた……♡」

そんなことが余程に嬉しかったのか、何度も嘔みしめるように呟く紅閻魔。

肉棒を引き抜いた後の幼腔からはドロっとした白濁が漏れ出し、我ながらよくもこれだけ出せたものだと感心する。加えてその脱力感と来たら、立ち上がることすら困難なほどだった。

「……これでは、朝食を食べにくいことすら……ままなりまちえんね」

「ああ、うん。本当に申し訳ない……」

せつかく起こしに来てくれたのに、この結末は如何なものか。

我ながら自分の性欲を反省すると共に、少女に精一杯の謝罪をする。

すると、紅閻魔はベッドに横たわりながら、すっかり疲れ切った様子で告げた。

「仕方ありません。マスターの朝食は、後でこの紅閻魔が特別に拵えてあげるでち。だから安心していいでちよ、ご主人♡」

優しく微笑んでくれる少女に、深い感謝を隠せない。

断る理由は当然なく、ここは彼女の提案に与るとしよう。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——マイルーム。

「ごちそうさまでした」

手を合わせ、礼をする。

その後、自室で特別に朝食を振舞ってくれた紅閻魔への感謝も忘れず、箸を置いたところで少女も頭を下げた。

「どういたしまちて。お口にあったようで何よりでち」

美味しそうに食べてくれたことが、本当に嬉しいのだと言って喜ぶ紅閻魔。

自分のためにわざわざ作ってくれたのだ。たとえ口に合わずとも、無下にする事など、どうして出来ようか。否——彼女ほどの英霊が作る料理に、間違いなどあるはずがないだろう。

「それにしても……ご主人の性欲には困ったものでち。英雄、色を好むと言いまちゆが……人理を救うマスターゆえ、それも仕方のないことだと理解してまちゆが……」

呆れたように少女は嘆息する。

いや本当に。その節は大変申し訳ないことをしたと思っています。

しかし——元はと言えば、彼女の方から始めた気がしなくもない。いくらサーヴァントとはいえ、マスターの性欲処理まで買って出る必要は無いのではなからうか。

「チチュン。そ、それは……………」

恥ずかしそうに頬を染める少女。

手に持っていたお盆で口元を隠し、何かを言い出せずにいる様子。だからその理由を訊きだそうとして——。

「…………ご主人は、その…………紅の旦那様でち。だから、こういうことをするのは妻として当然なものでち。…………チチュン」

録音機器を持っていなかったことが悔やまれる。

たった今流れた世紀の発言に思考がフリーズする。  
落ち着け、よく思い出してみよう。彼女は今、何と言った？ 旦那様？ 俺の？ そして自分を妻と称したのか？ ……可愛すぎる！

「い、今のは間違いでち！ つい勢いで言い間違えただけでち！ ご主人とあんなことをした後でちから意気衝天してしまっただけでちて——」

「——紅閻魔！」

「チチュン!?!」

慌てふためく少女をまたしても勢いで押し倒す。

当の紅閻魔も突然の事態に動転した様子を隠せずにいた。

「まじご主人!?! ま、まさかとは思いまちゆが——」

「この幼妻め！ あんな言い方されたら誰だって興奮するだろうが！ 人類最後のマスターの性欲を舐めんなよ！」

「へ、変態でち——！！！」

※このあと、滅茶苦茶セックスした。

靈基No.15

美遊・

エーデルフェルト



## PROFILE

身長：134cm 体重：30kg

無口で無表情でクールな女の子。  
イリヤが好き。

魔力供給回数：123回 絶頂回数：166回

好きな体位：後背位 処女喪失日：召喚から36日目

妊娠確率：99%【危険日】

当初は「イリヤと同じ幸せを共有したい」として始めた魔力供給。  
神稚児の性質で妊娠しやすくなっている。

## STATUS

絆LV 100  Next 0

性欲：D	☆☆☆☆☆	知力：A-	☆☆☆☆☆
体力：D	☆☆☆☆☆	母性：C	☆☆☆☆☆
従順：A	☆☆☆☆☆	反抗：E	☆☆☆☆☆
淫乱：D	☆☆☆☆☆	感度：A	☆☆☆☆☆

「あの……魔力供給お願いします。  
できればイリヤと一緒に……」



## SECRET GARDEN EX

### SG1：<sup>スーパー</sup>超小学生

あらゆる能力が超小学生級。知性的だが世間知らずでもあるのでズレた言動をよくする。

「膣内射精の妊娠成功率は状態にもよりますが20%前後。これではまだ不十分……ですよね？」

### SG2：被虐願望

責められることに弱く、かなりの受け身体質。時折見せる「クールを忘れたデレデレ甘々な姿」は同性すらも悶絶させる。

### SG3：イリヤ至上主義

イリヤが好き。かなり重め。友達の解釈を色々間違えているため、イリヤを中心に世界が回っている。クエストも魔力供給も基本的にイリヤと一緒に良い。

## WEAK POINT

### nipple：★★★★★

彼女の可愛らしい乳首はレオタード状の魔法少女衣装の上からでも確認できる。指先で念入りにくりくりされるのが好き。

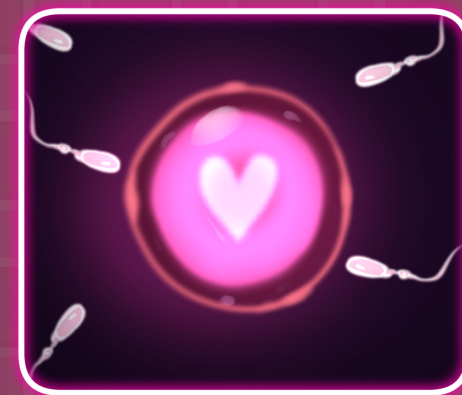
### clitoris：★★★★☆

敏感な少女の体でも特に繊細な部分。そこをイジメすぎるとデレモードが発動し「お兄ちゃん」呼びに変わる。

### vagina：★★★★★

性行為について知識はあったが、実際に体験すると全くの別物。膣内に勢い良く出されるのが気に入ったようで、イリヤの負担を減らす名目で魔力供給を申し出ることもしばしば。

## LIVE



状態：♥♥♥

神稚児の性質が反映されている。「孕ませたい」と強く願えば願うほどに確率は高まり、少女も強く望んでいる。

——ある日のカルデア。

資料館にして研究施設。標高6千メートルの雪山に拠点を構えるカルデア。

その内部はとにかく広大で、召喚されたばかりの少女は不安そうに廊下を歩いていた。

『大丈夫ですか、美遊様？』

「うん、心配しないでサファイア。ちょっと広くて迷っちゃったけど……うん、この辺り。スタッフの人たちに教えてもらった情報だと、イリヤの部屋は——あつた！」

キャスターのサーヴァント、美遊・エーデルフェルト。

このカルデアにおいては異質な「学校の制服」という衣装に身を包んだ少女は、召喚されて早々、ある場所を目指していた。

自分と同じ、平行世界から呼ばれた少女。

サーヴァントとしては一足早くカルデアに召喚された無二の親友——イリヤスフィー

ル・フォン・アインツベルン。

彼女が既に召喚されているという情報を聞いた美遊は、イリヤを探し、慣れない道を歩いていた。そして——見つけた。自分の斜め上を浮遊する魔術礼装『サファイア』と共に、イリヤに与えられたという自室までやってきたのだ。

(良かった……最初は知らない世界に召喚されて不安だったけど、イリヤがいるなら安心かな?)

目的の一室まで辿り着けたことで、少女はホッと胸を撫でおろす。  
そして扉をノックしようと、今まさに手で叩く瞬間だった。

「んっ……あ♡ おにい、ちゃ……やつ、ん、ふあ——もっと、してえ……♡」

(イリヤの……声……?)

117 不意に扉の奥から聞こえてきた声。

それは、確かに彼女のよく知る親友の少女のもので間違いなかった。

「ただ何かが——何処か様子がおかしい。聞いたことのない、自分の知らないイリヤの声。イリヤだけど、イリヤではない、そんな矛盾した感覚に襲われる。」

だから、ゆっくりと扉を開けた。

開くか開かないかという僅かな隙間で、内部の様子をうかがった。すると——。

「ッ……イリヤ、気持ち良いか……?」

「うん、うんッ……♡ マスターさんとの、魔力供給……♡ んっ、あ……すき、すきい……♡」

「ああ、だったらもっと気持ちよくしてやるからな……!」

「ひゃうっ……♡ ん、やんっ……はあ、はっ……もっとイリヤに、気持ち良いの……はんっ、うん……おし、えてっ……♡ おにい、ちゃ……やっあんっ、ん、あッ——♡」

嬌声と悲鳴。部屋の中で行われる、紛うことなき淫靡な行為。

それは見間違えようもなく、彼女の知るイリヤと……このカルデアにおける唯一のマスターである少年との性行為、すなわちセックスと呼ばれる行為に他ならなかった。

思わず声も忍ばせ、その一部始終を美遊は観察する。

口元を手で押さえ、僅かに空いた隙間から覗き込み、そして目の当たりにした。

(アレって——)

(はい。イリヤ様とマスター様でございますね。二人とも、どうやらそういう関係にあるようです。非常に興味深い事案です。通報案件です)

わざわざサファイアに説明されるまでもない、美遊も理解はしていた。

セックス——性器やそれに類する器官を用いた接触行為。特に近代以降の日本における呼び名で、原始人類的な意味で云うところの生殖活動。しかし必ずしも生殖と結びつくワケではなく、愛情や快樂目的で行われることも多い行為であると少女は知識として知っている。

もちろん知識は知識であり、実際にそれを見たり経験したりといったことはなく、だからこそ眼前の光景に圧倒されたのも事実だ。

（イリヤ……すごい、嬉しそう——）

自分の知らない親友の姿。暴かれた一面。

それを目の当たりにして、美遊は自分でも理解の出来ない不思議な感情に襲われた。

（魔力供給——うん、今の私たちはサーヴァントだから……でも、アレは——）

違う、そう断言できる。

単純な魔力供給では収まらない、強い愛情を感じる。

果たして、少女がその理由、原因、自分を襲う不可思議な感情の正体を探っていると、イリヤとマスターとの性行為……魔力供給も終わりを迎えるようだった。

慌てて姿を隠す美遊だったが、結局答えを出すことは出来ず——。

ただその胸に「もやもや」を抱いたまま、その場を後にするのだった。



——数日後、とある市街地での戦闘シミュレーションにて。

炎上した都市に佇む、一つの影。

黒い影を纏うそれは、サーヴァントの残滓が形骸を為した存在だ。ある種の怨念、未練と結びつき、一個の生命体として稼働する霊体の亜種。——シャドウサーヴァント。

巨人の如き屈強な影ではあるが、三人の少女たちは正面から立ち向かっていく。

前衛をイリヤとクロエ、後衛を美遊が務める三人一組の布陣。

召喚以前に知り合いだという三人の連携は、なるほど確かに的確だ。攻撃力の高いイリヤを筆頭に、器用なクロエが攪乱、キャスターである美遊が二人をサポートするという戦いぶりは、ステータスの上では凄まじい力を誇る影を相手にしても互角に渡り合う。

「いっくよーっ！ ツ——  
砲撃フキイア！！」

「いいわよ、イリヤ！ そのままヤツちゃいなさい！！」

極大な魔力弾が巨人を直撃する。

まさしく大砲の如き破壊力のそれは、巨人の肉体を以てしても受けきれるものではない。

（これなら大丈夫そうかな……？）

影が膝を付く姿を確認し、安堵する。

戦闘シミュレーションとはいえ、相手はシャドウサーヴァントだ。ただの魔獣にはない  
強靱な生命力、強さが存在する。

だが、それも心配なさそうだと息を吐いた。

敵は強いが、少女たちの連携はそれ以上に強力だ。マスターである自分が手を出す余地  
のないほどに息の合った戦いを披露してくれている。——そんな油断を見せた瞬間。

「美遊！！」

「ッ！？ サファイア、障壁展——きゃあッ！！」

イリヤがその名を叫んだ刹那、巨人の暴威が少女を襲った。

慌てて障壁シールドを展開する美遊だったが——致命的に遅い。不完全に構築した防御では敵の攻撃力を受け止めきれなかったのだろう。少女の身体が弾丸のように弾き飛ばされた。

「か、はッ……！！」

周囲を取り囲む壁と激突し、美遊は悶絶する。

戦闘中にして気を取られていたのか、その隙を見逃さなかった巨人の追撃が迫る。

「この、程度……！！」

慌てて立ち上がり、ステップキ礼装を握り直す少女だったが——ダメだ、足りない。立て直すための時間も、攻撃を受けきる用意も、何もかもが圧倒的に足りていない。

つまりは、致命傷。誰もがそう感じた。——ならば。

「マスター、何を……!?!」

決断は一瞬だった。

少女の眼前に立ち、マスタースキルの一つ・ガンドを使用。

目前に迫りつつあった巨人の一撃を防ぐと共に、防御不能の隙を生じさせる。そこを

「このっ……!」

「——倒れて!」

イリヤとクロエ、二人の斬撃が影を斬り伏せた。

巨人の体躯がゆっくりと塵に消え、その光景を見て自分もふうと胸を下す。

「……大丈夫か、美遊？」

「は、はい。あの……すみません、マスター。もう大丈夫ですから……」

そう言って、美遊は弱々しくも立ち上がった。

大事は無いようだが心配だ。念のため、訓練が終わったら医務室に連れて行こう。

「それにしても……珍しいわね、美遊が油断なんて。どうしたの？ 戦闘中に考え事？」

「えっと……うん、そんな感じ。だと思う」

「ほえ、美遊でもそんなことがあるんだね……でも良かった♪ マスターさんが守ってくれたおかげで、美遊も大丈夫みたいだし！」

イリヤが満面の笑みで感謝を告げてくる。

なに、マスターであるのだから当然のことをしたまっただ。

美遊はまだ召喚されたばかりで、イリヤやクロエに比べて霊基の状態も完全ではない。カルデアでの戦闘経験に乏しい彼女が遅れを取るのは無理もないことだし、彼女が一騎のサーヴァントとして確立されるまでの間、少女を護るのは俺の役目となるだろう。

「あ、ありがとうございますマスター」

俺がそう言うと、少女は深々と頭を下げて礼を言った。

彼女がしていたという『考え事』も気になるが——今は治療が優先だ。急いで戻ろう。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「……うん。霊基に問題は無し。召喚されたばかりで不安定だから、慢性的な魔力不足に陥っているだけ。安静にしてれば、直に霊基も回復するよ」

カルデアの医療スタッフが穏やかに告げる。

それを聞いて、俺とイリヤ・クロエは揃って安堵したように息を吐いた。

「心配を掛けてすみません、マスター。私が油断したばかりに……」

「いや気にしないでよ。俺の方こそ油断してた。だから謝るのは俺も同じだ」

素直な気持ちをつと吐露する。

医務室のベッドでは美遊が申し訳なさそうに顔を伏せていたが、とにかく無事なようである。安心した。不慣れなことも多いだろうが、これから頑張っていけばいい。

「それじゃね、お兄ちゃん♡ 美遊のこと、頼んだわよ。この際、美遊もお兄ちゃんと親睦を深めなさいな。何なら甘えちゃったり——」

「ク、クロってば！ ……ええっと、ごめんなさいマスターさん。美遊も早く良くなってね！」

そう言って、俺と美遊以外の全員が医務室を後にする。

自分だけが残ったのには理由がある。サーヴァントとマスター、経路パスが繋がっている以上、魔力をより多く供給するには双方の距離が重要であり、こうして一緒にいるだけでも供給量は格段に増えるからだ。

尤も、カルデアの電力がもたらす供給量と比べると、自分のそれは微々たる魔力量に過ぎない。けれど少しでも回復を早くするためには、やはり共にいるべきなのだ。

「……本当にすみません。こうして手まで繋いでいただいて」

接触した方が効率が良い、とは職員（とクロエ）の発案である。  
あくまで効率を考えた上で手を繋いでいるワケだが、やはりどうしても恥ずかしい。

「そう言えば、考え事——だったっけ？ あのととき何を考えていたんだ？」

恥ずかしさを誤魔化すようにして投げかけた質問。

途端、美遊は虚を突かれたのか急に押し黙り、代わりに彼女の側を浮遊していた魔術礼装・サファイアが説明を始めた。

『おそらくは、先日のマスター様とイリヤ様の性的行為についてお悩みだったのでしょう』

「……………は？」

『つまり、俗に言う魔力供給なる行為についてでございます』

「サ、サファイア……………!!」

礼装が告げる。少女が慌てる。

サファリアの言う事実——まさかアレを見られていたのか。先日イリヤとの魔力供給。レイシフトから帰還直後、魔力が欲しいとねだってきた少女との行為。すなわちセックスを。

「は、はい。イリヤに会いに行こうとして、それで……」

少女が気恥ずかしそうに説明する。

なるほど、それは数日前の……ちょうど彼女が召喚された日のことだった。

美遊の召喚に立ち会った自分は、彼女の知り合いだというイリヤに先んじて報告しようと部屋を訪ねて——けれど伝えるより早くイリヤが俺を求めてくるものだから、流れのままに魔力供給へと至ってしまったのだ。ああ、それを目撃してしまったという事だろう。

思い返せば、あの時の美遊の様子は何処かきこちなかったようにも思われる。

その理由を今になって得心し、申し訳ないことをしたと後悔した。

「……………」

「……………」

気まずい。実に気まずい。どうにも苦しい沈黙が流れてしまう。

俺も恥ずかしいし、友人の情事を垣間見た美遊はもっと恥ずかしいだろう。

どうにかしてこの沈黙を解消したい……そう次のセリフを考えていたら、たちまち少女の方から口を開いてきた。

「……マスターは、イリヤのことをどう思っているんですか？」

「ん……？」

彼女にしては珍しい抽象的な質問に、思わず首を傾げてしまう。

「どう」とは、どういうことだろう。

「それは——」

すると、美遊は決心したように告げる。

「イリヤは……初めて出来た、私の大切な友達です。掛け替えのない存在です。そんなイリヤを、もし傷つけるようなことがあれば——私は」

ギュッと握った手が、強く握り返される。

それは美遊の、彼女なりの、マスターとなる人間への仕えるべき基準だったのかもしれない。

大切な友達だと彼女は言った。

掛け替えのない存在だと彼女は言った。

だからこそマスターである者の性質は、慎重に見定めなければならない。最愛の親友に害を成すようであれば、それは許してはならないのだと。

「……ああ、そうだな」

だから俺も答える。

無論、イリヤを傷付けるつもりなど毛頭も無い。

彼女は俺にとって共に戦う大切な仲間であり、同じ使命を背負った相棒であり、そして守らねばならない妹のような存在だ。けれど、それは目の前にいる少女も同じなのだ。

「わたし、も……?」

首を傾げる少女に「そうだ」と短く返答した。

「俺にとって、イリヤも美遊も……クロエだって同じくらい大切な存在だ。こうしてカルデアに来て、一緒に戦ってくれて……本当に感謝してるよ」

それに、と続ける。

「君たちが俺以上に大変な使命を背負っていることは何となく分かってる。俺に出来ることは少ないし、何も出来ないかもしれないけど……せめてカルデアにいる間だけでも『自分の願いを叶えてほしい』、そう思ってるよ」

「」

ああ、それは何処かで聞いたような。

遠い昔に置き去りにされた——。

些細で、矮小で、脆弱で、けれども温かみのある……そんな願いだった。

「……マスターは、私が思った通りの人なのですね」

少女は思いを語るように滔々と吐き出していく。

初めて出会った日から、彼には妙な親近感を覚えていた。

一目見て信頼に足る人物だと、理由もなく判断が出来た。

無論、それだけで断定するのはイリヤ的に非常に危険なので、美遊も美遊なりに彼の素

性を明らかにしようとは動いてはいた。

「気づいていないかもしれないですけど……召喚されてすぐ、イリヤのマスターがどんな人なのか、イリヤに害をもたらすような人でないか調べるために24時間、三日三晩、マスターのことを監視させていただきました」

「愛が重い……!!」

さらっと言ってくれるなこの子。

道理でここ数日誰かの視線を感じて仕方がなかったのか。イリヤが絡むと途端に重くなる気がするけど、これも複雑な乙女心ということにしておこう。

「それで……結果はどうだったのかな？ 自分としては問題無かったつもりだけど」

監視というパワーワードが気になりはするが。

俺がそう言うのと、少女はクスリと薄く微笑んで告げる。

「はい。マスターは、やはりマスターでした。平凡で、お人好しで、無茶ばかりして……でもすぐく頼りになって、何事にも一生懸命で、私に大切なことを教えてくれる……イリヤと同じ、私の大切な存在です」

熱量の込められたセリフと共に、少女が温かい視線を向けてくる。

とりあえず高評価……をもらったと見て良いだろう。それでも直接的な好意を告げられたとあっては、やはり恥ずかしさを隠せないのが本心だ。

「だからマスター」

「……？」

やがて美遊は、こちらの手を胸に寄せるようにして握りしめ――。

「人理という名の命の繋がり。星々を繋ぐ、人々の願い。それを守るために戦う貴方の願い

を叶えさせてください。私の力を、貴方の戦いに捧げさせてください」

それは星に願いを掲げるかの如き、煌びやかな告白だった。  
サーヴァントとして。願いを叶える器として。

マスターの願いが成就して欲しいとする、夜空を輝かんばかりの鮮やかな祈り。

そんな思いを聞かされては、こちらとしても応えないワケにもいくまい。

人理を守る。そして、彼女の幸せも守る。この身に与えられた無二の使命に、もう一つ守るべき誓いが増えた……ただそれだけのことなのだから。

「あの……それで、ですねマスター？」

「ん……？」

もしもじと少女は告げる。

かくて夜空を覆う暗雲の如き迷いは消え去り——ああ、そして気づいたのだ。  
マスターとイリヤの行を見た自分が抱かされた感情の。

今日まで自分を苦しめてきた感情の正体。

それは憎悪でもなければ、失意でもない。親友を奪われたことへの嫉妬でもなければ、孤独感でもない。つまりは——羨望。この身を焦がすほどの情欲は、紛れもない、彼に對する親愛の証だった。

だから、ただ一つからなるお願いを伝える。

「少しでも早く……マスターの力に、お役に立ちたいです。なので……私にも魔力供給を、イリヤと同じことを私にもしてほしいです。こんなお願い、あなたに迷惑を掛けるだけなのに……ダメ、ですか？」

その意味が分からぬほど鈍感なつもりは無い。

少女の大胆であった要求に、自分も無言で首肯した。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「んっ……マス、ター……ん、はうんっ……あっ、ふう——はっ、あんっ……♡」

白を基調とした医務室。

他に誰もいないその空間を、少女の奥ゆかしい嬌声がこだまする。

「辛そうだけど、もし苦しいなら……」

「んあっ——やめ、ないでください……私は大丈夫、ですから……くひゃうっ♡ん、もっと……胸、触ってっ……ふぁ、あッ……いじって、くださいっ——んく、ああっ……♡」

服の隙間から手を通した、胸に直接触れる愛撫。

平行世界での——通っていた学校の制服だというその衣装は、なるほど繊細な造りをしていられるらしい。なるべくであれば脱がさず続けたい、そんな思いが強かった。

「はあうんっ、やあ……マスター、んッ……ふう、あッ——♡」

自分に背を預けた少女を、後ろから抱きしめるように。

ベッドの上で行われるそれは、他人から見ればひどく情熱的に映るだろう。

「はあ、ん、あっ……そこ、っ……くりくりっ、てしちゃ……ん、あうっ♡ マスターの指、すぐ的確で——わたしの、弱いところッ……あんっ、やっ……はっ、んんっ……♡」

美遊にとって、間違いなく始めてだろう刺激がそこにある。

自分でしたり、あるいは同性とのスキンシップで感じたこともあるのかもしれないが、それらとはまるで質が違うのだ。男に胸を弄られるという感覚は、おおよそ想像の出来ない代物だったに違いない。

「これ、って……前戯、ですよね……？ 本番の前の……愛撫、っ——性行為がしやすく、より感じやすくするための……準備、んっ……ふっ、あ♡」

ああ、そのつもりだ。

より効率的に魔力を供給するなら、互いの性感を高める行為は欠かせない。

「ん、やっぱりっ……マスターは、ちゃんと……考えてるんですね……♡ ただ……エッチなことが、したいだけなのかと————ンンっ、あッ……でも、そんなことなくて————んっ♡」

何故だろう、非常に居たたまれない気持ちになってくる。

これは健全な魔力供給である、そう信じる少女をまるで騙しているような気分だ。

「あ、んっ……んっくうっ……やっ、ますたあ……そんなに、刺激しちゃ、いやあ……ひうんっ♡ あっ、はああっ……先っぽが、すぐく気持ちよくなってっ……あっ♡ ああッ♡」

胸の先端、乳首のあたりを愛撫すると、美遊が恥ずかしそうに声を漏らした。小指程度の大きさもないそれを摘み、あるいは周辺の乳輪をなぞるように。

やがて可愛らしく屹立したそれを指で弾くと、「ひゃんっ♡」という短い嬌声が反響した。

「んっ、あっああッ、それ、ダメっ……！　ますたあのゆびっ、すごくエッチで……こんな気持ちになったの、初めて……っ！　んっ、ふぁ……あ、あん♡」

「……もしかして声我慢してる？　別に我慢なんてしなくても——」

「やぁ……だめ、ですっ……恥ずかしいから……そんな声、聞かせられなッ——ん、っ♡」

必死に口を閉じ、喘ぎ声を我慢する美遊。

その様子もいじらしくて可愛いが、やはりマスターとしては彼女の正直な姿を見たいのが本音だ。おそらくはまだ誰も見たことがないだろう、快楽に喘ぐ少女の素顔をだ。

「やんっ……マスター、そこは……!?!」

唐突に進路を変えた右手、それが向かう先は少女の下半身だ。  
 胸から腹部をツーッと滑り落ちていき、指先は彼女の陰部へと向かっていく。小学生らしい実に清楚な純白の下着。スカートを捲って現れたその上から、彼女の敏感だろう部分を愛撫する。

「くっ、うううんっ……!! あっ、ンンっ……はっ、はあ、そこは、ダメッ——  
 ひゃあああ♡ んんっ、はっ……あっ、ああ、マスター……あんっ♡ あっ♡ んあっ♡」

ビクンッ、と身体を跳ねさせる美遊。

それほど陰部——繊細で華奢なその部分は、予想以上に敏感だったということだろう。

「ん、やあ……はう、んんっ♡ あ、あっ——はあ、あああっ……♡」

下着の上からでも分かるほどに、美遊のそこは湿っていた。  
 触る前から、あるいは触ったからこそ、そうなったのか。

下着越しに見える少女の幼いスジをなぞると、彼女の快楽の象徴である愛液がグジュグジュと音を立てて滲みだす。止め処なく溢れ出す。

「見な、いでえ……ん、あんっ、あ、やあ……いや、マスターっ……んッ、あ♡ 違い、ます……これは何かの、間違いで——ん、にやあ、あっ、やっ♡」

両手で顔を隠し、美遊は眼前の光景を否定する。

愛撫の指を濡らす蜜液の量は、もはや洪水と称しても問題ないだろう。そんな彼女の恥ずかしがる様子を目の当たりにして、自分の手淫も一層加速する。

「ん、あっ、はあっ、あんっ——だめですっ、また、ッ……♡」

「……我慢なんてしなくていい。俺はそんな美遊も好きだ」

そう言って、指先を少女の下着の内側——つまりは、愛液したたる少女の割れ目へと、直に指を伸ばしていった。

途端、直接的な刺激に反応したのか、美遊の身体がブルルツと震動を見せる。

なるほど、これは興味深い。美遊のそこは幼女特有の柔らかさに満たされており、ぷにぷにとした手触りと愛液の感触、そして少女の膈内の温かさが代えがたい気持ち良さを生み出していた。だから夢中になって愛撫を続けるが、少女はその度に実に素直な反応を見せてくれる。

「あ、やっ、指止めてっ……これ、きちやうっ……♡ マスターの前で、イツちゃう……♡」

彼女の限界は一目瞭然だった。

美遊は身体を小さく丸め、今まさに訪れる絶頂に備えている様子だ。

「ああ、イッていいよ。美遊のイクところ、俺に見せてくれ」

「ん、やですっ……マスターに、そんなところッ……あっふあっ、はっ、はうんっ……見せられないの……♡ んあっ——あっ、ンン、あうん、はあっ……♡」

必死に堪えようとしているところ悪いが、俺は見たくて仕方が無いのだ。  
彼女が見せる、始めての本気の絶頂を。

普段の少女からは想像の出来ない、快楽を泣き叫ぶ瞬間を。

見たい——その一途な思いがひた走る。乳首とロリ穴、そして開花した陰核への同時愛撫。ただただ激しい執拗な愛撫が、ようやくくして実を結ぶ。

その瞬間——。

——ぶしゅっ、ぶしゅああああああああああ！

「んっ——ああああああつっ……!! やっ……んっ、あっ♡ あんっ♡ はっ、ん  
あっ♡」

凄まじい絶頂の瞬間。

——ビクン、ビクン、と。

淫裂から絶頂の証拠が噴射される度に、美遊は身体をバネ仕掛けのように揺らす。

この小さすぎる身体を、経験したことのない膨大な快楽が襲ったのだ。本来であればもっ

と成長した肉体で浴びるべきそれを、少女はその矮躯で以て享受した。その刺激は絶大なものがあるだろう。

「ます、ひゃ……わたし、イッて……♡」

「ああ、でも可愛かったよ」

『同感です。永久保存版にすべき愛らしさです』

すっかり力を失くした美遊は、倒れるようにして自分に身体を預けてくる。

彼女にしては恥ずかしい蕩けた顔も、自分には可愛いという感想しか出てこない。

——ところで、サファイアは何をしているのだろうか。

——この礼装、もしやこの状況を愉しんではいまいか。

「あの……マス、ター」

「ん？」

すると、美遊が視線を向けてきて。

「本番は、これから……なんですよね。今までの、あくまで前戯……魔力供給、まだ終わっていませんよね——？」

そう尋ねる少女の瞳には、これまでにない、情熱的な感情が灯っていた。

まるで期待をするような、ねだるような。

そんな言い方をされては——ああ自分としても我慢など出来るはずがない。既にズボンの内側では肉棒が十全の勃起を果たしているし、それを解放せずしては終われない。

「……はい、少し怖いですけど……マスターのことは信頼してますから」

嬉しいセリフを言ってくれる。

ならば自分も、彼女の望む通りのことをしてあげよう。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

「あの……これには何の意味があるのでしょうか？ 無い方が効率的、ですよね……？」

「いいから、いいから」

ベッドで四つん這いになる少女は、悩まし気にそれを問う。

お尻をこちらに向ける恥ずかしい恰好だろうに、彼女には理解できていなかった。

『美遊様、それはマスター様の性癖……もとい趣味嗜好と呼ばれるモノです。十人十色、蓼食う虫も好き好きと言います。どうか理解してあげてください』

149 「……うん、分かった。とりあえず『マスターは変態』ということだけは理解したよ」

冷やかな目を向けてくる美遊。その視線もたまらない。  
確かに、彼女の指摘は至極当然だ。ランドセルを背負うことに供給上の意味など有りはしない。

「それじゃあ、始めるぞ——」

「はい。——ん、あっ♡」

少女の背後に立つと、自分は彼女の下着をするすると脱がしていった。  
現れたのは、獣の姿勢で待機する美遊の——彼女の隠された部分、幼すぎる雌穴。  
まるで期待しているかのように濡れたそこは、男の欲望を待ちわびるべく揺れていた。

「やあ……恥ずかしい♡」

陰部を突き出す格好であるため、美遊にとっては相当な羞恥だろう。

「ちなみに、これから何をするか分かる？」

「……はい。セックス——つまり性器を用いた生殖行為です。男性器を女性器に挿入し、ピストン運動による摩擦で快感を強化。性的興奮が最高潮に達したオーガズム状態に起こる男性の射精によって、精液中の精子と卵子が受精・着床。これによって女性は妊娠するものとされています」

「知識が正確すぎる……」

小学生にしては深すぎる知識を持っていることは知っていたが——。

まあそこまで詳しいのであれば、わざわざ説明の必要は無いだろう。

そうして、少女の雌穴……ひくひくと震える膣口に肉棒を近づけ、挿入の瞬間を待つ。

「あ、んっ……マスター……!!」

ぴとっ、と亀頭を入口に触れ合わせた瞬間、美遊が甘い声で鳴いた。前戯により十分に濡らしたとはいえ、彼女の膣穴は依然としてキツいままである。少女もそれを分かって、ギュっと目を閉じ——腰を突き出した刹那。

「ん、くっ、ああっ——んああ、あ、はあああああっ………♡」

みち、という歪な音。

薄い膜を突き破る感覚。

少女の最後の咎さえ打ち破ってみせた自身のそれは、瞬く間に彼女の膣内を支配した。

「くう、うんっ——あ、はあっ、はっ………ますたーの、おく、までえ………♡ はひっ、はあ、ああんっ、はっ………ん、ああああっ………!!」

腰を完全に押し付けた瞬間、美遊の身体は力なくベッドに倒れ伏した。

挿入の衝撃に足腰が立たなくなっただか。もちろん挿れて終わりでないことは理解しているだろうが、流石の彼女も耐えきれなかったのだろう。

「美遊、悪いけど我慢できない。——動くぞッ！」

「はえ……？——はうんんんっ……♡ はっ、やっ……マスター、ダメっ……これ、深いところ……んっ、い、いや……おちんちん、奥まで来てるっ……くふっ、ンあっ、ん、あんっ、あっ、んああっ♡」

不意に動き出したペニスの抽挿に、美遊は悲鳴にも似た絶叫を上げた。

腰を前後に激しく振り、少女の膣奥へ肉棒を叩き込む。パンパンッという肉の打ち合う音を響かせながら、自分は一心不乱に彼女の膣内へ衝撃を撃ち込んでいた。

「んん、はうんッ……んあ、はあッ——マスターの、おちんちんっ……♡ くるしい、のに……変な感じ……ん、くうっ……お腹のなか、あつくて……んっ、はあ♡」

後背位——さながら獣の交尾の如き姿勢。

初潮を迎えたかすら微妙な年端の少女を組み伏せ、背後から一方的に叩き込む。

だというのに、美遊の口から漏れ出す声は悉くが甘く、そして艶めかしい。少女のそんないやらしく甘美な声を聴いていると、必然、背後から突き刺す体勢の動きにも一層熱が入った。

「んんっあう……あっ♡ んぁ♡ この格好、っ……深いところ、届い、てっ♡ あっ、いやっ……こんなこと、知らなッ——あ、んんッ……好きっ……これ、気持ち良い……♡」

肉の打ち合う音と愛液の弾ける音とが木霊する中、少女の嬌声が激しさを増す。

「もっと……して、くださいっ……♡ もっと、私の、なかっ……♡」

次第に自ら快楽を求めてくる美遊だったが、そんな彼女を見ていると唐突に嗜虐心が沸き上がってきた。

彼女のもっと恥ずかしがる部分が見たい。そう思い、意地悪に聞いてみる。そんな抽象的なセリフでは分からない。何処を、どうして欲しいんだ、と。

「やあ、んっ……マスター……それ、は——♡」

彼女の切なげな声にゾクゾクと興奮する。

抽挿の動きも緩め、さながらお預けを喰らわせた状態。

もどかしい思いでいっぱいだった少女は、羞恥を極めてそれを言う。

「おま、んこっ……マスターの、おちんぽっ……♡ 私の、おまんこの奥に……もっと激しく、ズボズボ突いてっ——くささいっ……♡ ひゃっ——んんあああっ……ンあ、はあ、うあ、ああんっ♡」

卑猥なセリフと共に告げられた要求。

よく出来ましたとまさに言わんばかりの刺激を与えると、美遊は嬉しそうに鳴いた。

「あっ……やんッ、これっ……すき——あっ、好きっ……♡ マスターとの、魔力供給……くせに、なっちゃ——はう、んんっ、はッ、あっ♡」



このたまらなく可愛い少女を、もっと深く愛したい。

(ツ……イリヤは、こんなことをマスターと……だから、あんなに……)

後ろから執拗に攻められ、美遊はいつぞやの記憶を思い出す。

快楽に染まった親友の顔。聞いたことのない甘い声。

今ならば分かる、理解できる。納得もするし、共感も出来た。魔力供給というのは名目で、ただ快楽を食うだけの行為だったと言われても今ならば信じられる。

(美遊の膣内が……これ、は——)

途端、少女の膣道が収縮を始めたことを実感した。

まるで快楽を食らんとする彼女の意思が反映されたように、より一層キツさを増した膣内は肉棒を根本から締め上げる。

ああ、それに——嬌声に交じって鳴り響く音、その光景。狙い通りとは言え、霊衣の一部であるランドセルを背負わせたことは、背徳感を更に一段と強化した。

サーヴァントである以上、実際の外見が年齢と直結することはない。

しかし、平行世界では学校に通っていたというだけあって、まるで本物を相手にしているかのような背徳の事実がそこにある。大人びてこそいるが、美遊もまだ「生徒」ではなく「児童」と呼ぶべき年齢であるのには違いない。

『良い表情です、美遊様。大変可愛らしいです』

「サ……ファイ、ア……見ちゃ、だめっ……♡ 恥ずかしい、からっ……見な、いでっ♡」

正面を浮遊する一基の礼装。

それもまた美遊を辱める要因の一つとなっていた。

加えて、礼装が輝かせるあの赤い光は——うん、間違いない。サファイアめ、RECしてやがる。マスターである少女が喘ぐ姿を。気持ちよさそうに快楽を貪る姿を。

「んん、ああっ……はっ、いやあ……ますひゃ、っ……んっ、イツちゃ……♡ もうらめっ、イツちゃう、んっ——あっ♡ あん♡ やっ♡ んああッ♡」

ベッドに突っ伏した美遊は、もはや限界も間近と言った様子で泣き叫んでいた。  
これ以上は耐えられない——そんな気配を察し、自分も最後の一手に出る。

「ふあ、マスター何を……——ん、にゃあああああつっ♡ あっ、はっいやッ……♡  
これ、下かりゃ、来てっ——はう、あんっ、ひっ……エッチなのが、止まらにヤッ……  
♡」

転瞬、俺がそうすると美遊はこれまで以上に甘く蕩けきった悲鳴を叫んだ。

背後から獣のように突き付けていた体勢を変え、彼女の身体を正面から抱えるように  
——対面した状態でのセックス。下から突き上げる形となったそれは、少女の身体を  
また違った快楽で満たし始めていた。

「ん、んんっ……マスター♡——あむっ、ん、んじゆる、ずじゅ、ちゅぶ、じゆる  
る……んちゅ、ちゅぶ、ちゅぱっ……じゅず、ぢゆる、ぢゅうううう……♡」

向き合う体制となったことで、必然的に自分たちは口づけを始めていた。どちらからということでもない。見つめ合った瞬間、気づけば互いに求め合い――。

「ん、ふう……ちゅむ、ちゅぶ、ずちゅっ……ん、んう、んちゅう……♡」

下半身の動きも忘れず、少女の口内にも舌を挿入する。

美遊もこちらの背中に腕を回し、しがみつくような恰好でキスを続けていた。

ああこれはもう耐えられそうにない。純粹な気持ち良さとしてもそうだし、眼前の背徳的な光景、そして普段はクールな彼女が甘えた子供のようにキスを求めている現状が……その全てが相乗して、自分に強烈な射精感をもたらしていた。

「限界だ……！ 美遊、膣内<sup>な</sup>で出すぞ……！！」

「ぶあ――うん、は、はいっ……おにい、ちゃ……♡ いいよ、出してっ……私の膣内<sup>な</sup>に、おにいちゃんの出して、くだひゃいっ……♡ れんぶ、なかに、くださいいっ――んっ、あ、はあ、ああああっ……！！」

極めつけは「それ」だった。

無意識の内に出た少女の言葉が自身にトドメを刺す。

一秒後に訪れる解放感。一秒後に襲い来る酩酊感。

全てを期待して、渾身の一突きを繰り出した。

少女の最奥。腔奥。足を絡め、腔内射精をせがむ少女に——瞬間。

—— ビュルルルウウ！！ ドビュルル、ビュルウ、ドビュウウウツツ……！！

「あ——ああああ……！！—— はっ♡ あん♡ 出て、る……♡ マスターの、精液っ……♡ 私、奥にっ——ん、はああああ……♡ 好き、ですマスター……もつと、もつとっ……♡ ん、んうううっ……！！」

肉棒は衝動の一切を少女の子宮に吐き出した。

押し寄せる精液の感覚を美遊は全身で享受する。

身体をブルブルと震わせ、しがみ付くように。

やがて全ての精液を吐き出し終わると、少女は力なく倒れて呟いた。

「すごい……身体の奥から、魔力に満たされてく。これが魔力供給……イリヤは、これを……」

そんな呟き、そんな充足感。

少女の視線と再び重なり合った瞬間、またしても自分と美遊はキスを始めていた。互いに力を使い果たしているため、触れ合わせるような軽い口づけだ。

「ん、ふう——ちゅ、んちゅ……んむっ、んちゅ——♡」

甘えだしたら止まらない、そんな様相を呈した目の前の少女に自分も最大限の愛で応える。

今はただ、彼女が納得するまでこのままでしょう。

∞ ∞ ∞ ∞ ∞ ∞

——後日、資料室。

英霊の逸話や伝承。サーバントたちのマテリアルが記録された一室。何かレイシフトに活かせる情報は無いかと訪れたそこで、自分は資料の山に囲まれていた。

眼前には難しい表示を並べたモニターやキーボード。

そんな研究作業のただ中、唐突に資料室の扉が開かれる。

「美遊ー！ ……って、あれ？ マスターさん？」

「や、やあイリヤ。どうしたんだ急に？」

扉を開けて現れたイリヤと……それにクロエも一緒か。

二人してこんな場所に何の用だろう。  
そう尋ねると、イリヤはキョロキョロと室内を見回して言った。

「あの、美遊見てないですか？ 部屋にもいなくて……」

「さ、さあ？ 俺は見えないな……」

「あれー、おっかしいなー。美遊の声、確かに聞こえたと思っただけ……」

「……気のせいでしょ、イリヤ。ほら、さっさと別の場所探しに行きましょう」

そう言って、クロエが退室を促す。

姿が見えない以上、この部屋に目的の少女はいない。否——いるはずがないのだと。

「お邪魔しました、マスターさん！ もし美遊のこと見かけたら私の部屋に来てって伝えてください！ それとマスターさんも、お仕事？ 頑張ってください！」

「じゃあね、お兄ちゃん。お仕事も程々にしておきなさいな、程々に……ね♡」

イリヤとクロエが部屋を後にする。

扉が完全に閉められ、彼女たちの足音が遠ざかっていくのを確認し……俺は息を吐いた。

「まったたく……もう少してバレるところだったじゃないか、美遊」

「んじゅ、ちゅぷ——ふぁ♡ ……マスターがいけないんです。こんな場所で、おちんちん大きくしちゃうから……」

視線を下に向ける。

すると、そこには自分の肉棒をいやらしく咥える、一人の少女の姿があった。

「ちゅぷ、ぢゆる、じゆるるっ……♡ はやく、出してくださいっ……イリヤ、私を探してるから……また戻ってくるかもしれない……あむ、んじゅ、ちゅぷう、ぢゆるうッ——

「♡」

机の影に隠れた少女は尚も口淫を続ける。

イリヤたちの位置からは見えなかったとはいえ、彼女たちが部屋にいた最中も美遊はこうして口淫を続けていたのだ。元はと言えば仕事を手伝うと言い・付き添ってくれた彼女に、自然と劣情を及ぼしていた自分が悪いのだろうか――。

「だからって、無理に付き合ってくれなくても……」

「んあ……らって、こうれもしないと、イリヤに手を出すじゃないですか」

「そんなこと、は――」

「だから、マスターのお世話は私に任せてください。これもイリヤを守るためです。私なら、マスターの変態的な要求にも応えてあげますから……♡」

そう言って、優しくペニスを愛撫する少女の様子は、  
クールで無表情ながらも、僅かに興奮を隠せていないようだった。